

Title	談話におけるメタファー継承の論理的効果
Author(s)	古山, 慎治
Citation	
Issue Date	2001-03
Type	Thesis or Dissertation
Text version	author
URL	http://hdl.handle.net/10119/733
Rights	
Description	Supervisor: 下嶋 篤, 知識科学研究科, 修士

修 士 論 文

談話におけるメタファー継承の論理的効果

指導教官 下嶋 篤 助教授

北陸先端科学技術大学院大学
知識科学研究科知識システム基礎学専攻

950078 古山 慎治

審査委員： 下嶋 篤 助教授（主査）
 杉山 公造 教授
 石崎 雅人 助教授

2001 年 2 月

目次

第1章 はじめに	1
1.1 メタファーの継承記述	1
1.2 記述表出のパターン	3
1.3 研究方針	4
第2章 概念対応説とメタファーの生産性	5
2.1 BLACK (1962) の相互作用理論	5
2.2 LAKOFF & JOHNSON (1980) の概念的隠喩論	7
2.3 継承記述とメタファーの生産性	9
第3章 類推写像理論	11
3.1 LAKOFF & TURNER (1989) の写像理論	11
3.2 INDURKHYA (1993) の相互作用理論	14
3.3 GENTNER (1983) の構造写像理論	18
3.4 まとめ	23
第4章 メタファーの継承記述のカテゴリー	24
4.1 継承記述の再定義	24
4.2 記述表出パターンの分析	24
4.3 制約構造の分析	26
4.4 事例分析	29
4.4.1 帰結の制約写像	29
4.4.2 非帰結の制約写像	36
4.4.3 無矛盾の制約写像	42
4.4.4 収束型制約写像	45
第5章 考察	51
5.1 遠隔推論－状況認識における有効性	51

5.2	記述表出パターンー表現における効率性	51
5.3	制約写像と類推写像理論との比較	52
第 6 章	おわりに	54
6.1	本研究のまとめ	54
6.2	課題	55
参考文献		56

目 次

図 2.1 メタファーの派生例 (1)	8
図 2.2 メタファーの派生例 (2)	9
図 3.1 ベース領域における関係構造図	21
図 3.2 写像結果	22
図 4.1 記述表出パターンの表現図	25
図 4.2 制約構造の表現図	27
図 4.3 事例 1 における記述表出パターン	29
図 4.4 事例 1 における制約構造	30
図 4.5 事例 2 における記述表出パターン	31
図 4.6 事例 2 における制約構造	32
図 4.7 事例 3 における記述表出のパターン	34
図 4.8 事例 3 における制約構造	35
図 4.9 事例 4 における記述表出のパターン	37
図 4.10 事例 4 における制約構造	38
図 4.11 事例 5 における記述表出パターン	40
図 4.12 事例 5 における制約構造	41
図 4.13 事例 6 における記述表出パターン	43
図 4.14 事例 6 における制約構造	44
図 4.15 事例 7 における記述表出パターン	46
図 4.16 事例 7 における制約構造	47
図 4.17 事例 8 における記述表出パターン	48
図 4.18 事例 8 における制約構造	49

第 1 章

はじめに

1.1 メタファーの継承記述

我々の日常はメタファー（隠喩表現）に満ちている。メタファーとは、端的に言えば「もののたとえ」であり、ある理解対象（ターゲット領域）を、利用可能な既知の事柄（ベース領域）に見立てて表現する技法である。例えば、「時は金なり」、「暴力団は社会のガンである」、「議論が暗礁に乗り上げる」、「愛が芽生える」、「理論を構築する」、「情報の波に溺れる」、「新しいビジネス分野を開拓する」等々、既に慣習的になり陳腐化されたものも含め、我々は実に多くのメタファーに日々接し、また使用しているといえる。字義通りに解釈される表現ではなく、むしろメタファーだからこそ容易かつ効率的に物事をとらえ、理解することができるということも多くある。こうしたことは、メタファーというものが単なる修飾的な言葉の技法にとどまらず、我々の合理的な認知方略としても機能していることを示唆するものである。

そうした日常的なメタファーの使い方において、ある一つのメタファーを契機に、そのベース領域を引き継いでさらに話を広げていくというものがある。ベース領域での話の展開によって、暗にはあるがしかし豊かにターゲット領域について語ろうとするものである。本研究ではこうした現象を特にメタファーにおける「継承記述（inherited metaphoric description）」と呼ぶことにしたい。次に挙げる事例について考えてみよう。

〔事例〕

（渡部）官僚制というと、いかにも難攻不落のように見えますが、案外、攻めるのは簡単だと思うのです。ただ、その際において、ぜひ制度として確立しておかねばならないのは、何度も繰り返しますが、犯罪的越権行為をした官僚を法で裁くことと、天下りの道を塞ぐことです。

（谷沢）やはり、天下りは法律で禁止しなければなりません。

実際問題としては、「天下りと普通の転職と、どこに線引きをするのか」という議論が出てくるわけですが、たとえば、さしあたり局長クラス以上は天下りとして禁止する。それ以下であれば許可するというものでいいんじゃない

ないでしょうか。

もちろん現実には、局長になる前に転職して、将来の頭取候補として民間銀行に入る例は現在でもあるわけです。それも広義の天下りであることに間違いはないのですが、これはまだ罪が軽い。

というのも、そのレベルですと職務権限はまだ大きくない。権限というのは魔物でして、それをいったん行使して、味を覚えますと、もはや人間が変わってしまうのです。それを体験する前に民間に入ったのであれば、私は許してもいいと思います。

（谷沢）それに、たとえばパラシュート式に転職しても、①.やはり民間の水は官庁のぬるま湯とは違います。②.そこで生き残って出世しようと思えば、民間の水の中で力一杯泳がなければ駄目なのですから。

（渡部）自分の力で泳げるのなら、ね（笑）。

（谷沢）③.そりゃ溺れるのも、いっぱいいるでしょうね（笑）。だから、四十ぐらいまでの転職は、大度量をもって許しておく（笑）。

（谷沢永一・渡部昇一『誰が国賊か』。クレスト選書。1996.）

これは、官僚の天下りについての対談内容からの抜粋である。この中での特に谷沢氏の発言、下線部①から③に着目したい。まず、下線部①「民間の水は官庁のぬるま湯とは違います」によって、民間企業と官庁との職場環境を「水」と「ぬるま湯」に見立てて比較した上で、さらに下線部②で「民間で生き残って出世」するには、そうした「民間の水」の中で「力一杯泳がなければ駄目」と述べている。さらに言えば、その直後の渡部氏も「自分の力で泳げるのなら、ね」と、谷沢氏によって導入されている、「水」に関するベース領域を使って述べている。そして、ぬるま湯ではない水の中を、自分の力だけで力一杯泳いでいかなければならないということから、下線部③での「そりゃ溺れるのも、いっぱいいるでしょうね」という記述に至っている。確かに、通常、水の中を自分の力だけでしかも力一杯泳いでいかなければならないとすると、体力やあるいは水泳の技量がなければ溺れるという事態を招く。この場合、文①から文③に至る記述は、ベース領域でのこうした論理構造あるいは制約を利用することによって話を進めながら、そこからターゲット領域、すなわち「民間企業で出世する」ことの厳しさについて暗に述べられている、メタファーの継承記述ととらえられる。読み手はこうした継承記述における論理構造をターゲット領域において再現させることによって、本来述べようとされている事柄や現象を推論しているといえよう。いいかえるなら、ベース領域の論理構造をターゲッ

ト領域へと写像していることになる。こうした推論は「遠隔推論 (reasoning at a distance)」にとらえることができる。遠隔推論とは、ある対象 a について推論する時に、別の対象 b に a を表現させておいて、b について推論をおこなうことで、間接的に a について推論をおこなうというタイプのものである。先程の例でいうなら、対象 a が「民間企業で出世する」というターゲット領域、対象 b が「水」というベース領域にあたるといえる。

メタファーの継承記述にはこうした遠隔推論が深く関わっていると考えられる。遠隔推論に関するさらに細かい議論や、継承記述の事例分析については第4章に譲るとしたい。本研究では、こうしたメタファーの継承記述という現象を取りあげる。

1.2 記述表出のパターン

メタファーの継承記述においては、ベース領域のみの記述が表出していたり、あるいはベース領域とターゲット領域の記述とが混在して表出していたりする。例えば、前節で紹介した事例において、文①「やはり民間の水は官庁のぬるま湯とは違います」および文②「そこで生き残って出世しようと思えば、民間の水の中で力一杯泳がなければ駄目なのですから」はそれぞれ一つの文の中にベース領域およびターゲット領域が混在して表出しており、それに対して文③「そりゃ溺れるのも、いっぱいいるでしょうね」は、ベース領域のみの表出にとらえられる。また、この場合文①が「水」に関するベース領域を提起し、継承記述の契機となっている。記述表出のパターンとは、こうした、どの領域の記述がどのような順番で、そしてどのような効果及び役割を担って出現しているかということである。こうした記述表出のパターンというものは、メタファーの継承記述の議論における一つの大きな観点であるといえよう。本研究においては、一つの文に、継承される隠喩的な言語使用と字義的な言語使用とが混在して表出しているものを「混在記述 (mixed description)」と呼ぶこととする。また、詳細は第3章で述べるが、両方の領域の記述が表出している混在記述とは逆に、ある一つの記述によってベース及びターゲット領域の双方における事柄を一度に表現できるものもある。こうしたものを特に「収束記述 (converging description)」と呼ぶこととする。特に収束記述については、言語表現の効率性を考える上で重要な示唆を与えてくれることが期待できる。

ここまでの議論を整理すると、メタファーの継承記述の分析における重要な観点は次の2つであると考えられる。

1. 遠隔推論における制約構造
2. 記述表出のパターン

そして、こうした観点からの分析を踏まえ、メタファーの継承記述の有効性について議論する。

1.3 研究方針

メタファーの継承記述と関連する現象として、既に Lakoff & Johnson (1980) によって、一つのメタファーを基盤として様々なメタファーが派生するという、メタファーの生産性について議論され、また、ベース及びターゲット領域間の構造的対応に言及されている。それに対して本研究の特色は、そうした領域間で対応する構造が、遠隔推論における論理構造や制約である場合に焦点を絞っていること、また、継承記述における推論のありかたのみならず、従来のメタファー研究では十分に議論されていない、ベース及びターゲット領域における記述表出のパターンに着目する点である。

制約の写像に関しては、メタファーおよびアナロジーの先行研究における類推写像理論との比較を踏まえ議論する。特に、Lakoff & Turner (1989) の写像理論、Indurkha (1993) の相互作用理論、Gentner (1983) の構造写像理論を取りあげる。これらの理論は、ベース領域とターゲット領域との部分的な構造的な同型性に着目している点において共通している。

本研究では、遠隔推論における制約の構造ならびに記述表出のパターンから、メタファーの継承記述のカテゴリーを提示し、また、小説、随筆、新聞記事等から収集した事例の分析を通して、メタファーの継承記述の有効性について議論する。

第 2 章

概念対応説とメタファーの生産性

2.1 Black (1962) の相互作用理論

メタファーの本格的な分析的研究については、Richards (1936) および、彼の理論を引き継ぎさらに展開させた Black (1962) によって一つの重要な土台が作られたといってもよい。その重要な土台とは、ある文内における隠喩としての語とその他の字義的な語との相互作用 (interaction) を軸に隠喩文を分析するという、メタファーの基本的な分析の枠組みのことである。ここでいう「相互作用」とは何であるかについてはのちほど議論するが、一つの文内で隠喩的な語と字義的な語とを分別するという分析の枠組み自体は、本研究における記述表出のあり方の議論においても有効である。また、Black はメタファーの効果について、単に言葉の表面的な問題としてではなく、隠喩的な語についての語彙概念と字義的な語についての語彙概念との概念間の対応においてとらえている点も興味深い。本研究においても、ベース領域およびターゲット領域というものの考える上では、なんらかの概念というものを想定することになる。

Black は、まず基本的にメタファーというものを、ある語は隠喩的に使用され、その他の語は非隠喩的に、すなわち字義的に用いられているような文もしくは表現であるとしている。このような定義づけによって、メタファーと格言 (proverb)、寓意 (allegory)、あるいはなぞなぞ (riddle) といった、文そのものが隠喩的であるものとを分けて議論している。そして、ここでいう隠喩的に使用されている語を「焦点 (focus)」、字義的に用いられている文の残りの部分および文脈を「枠組み (frame)」と呼ぶ。そうすることで、隠喩的に使用されている語に我々の注意を向け、字義的に用いられている、文の残りの部分とのコントラストが強調されることになる。こうした「焦点－枠組み」というとらえかたは、Richards (1936) における「主意 (tenor)－媒体 (vehicle)」というとらえかたを受け継ぎ、さらに議論を展開したものといえる。Black のいう相互作用とは、この焦点－枠組みにおける作用のありかたのことである。

Black が挙げている「人間は狼である (Man is a wolf)」という例について考

えてみよう．ここでの焦点は「狼 (Wolf)」である．つまり「狼」という語は隠喩的に使用されており，字義通りにその生物学的属性においてとらえられはしないということになる．読み手に喚起されるのは，むしろ「狼」に関しての「連想される常識的な事柄の体系 (the system of associated commonplaces)」であると Black は言い，さらにメタファーの有効性とは，こうした体系が真理であるかどうかということではなく，その体系が解釈において容易にかつ自由に喚起されることにあると述べている．またこうした体系は，有効な場合に限り，既存の常識的体系からは逸脱したアドホックなものでもよいとしている．

さて，喚起される「狼」の体系の例として，他の動物を餌食にし，狂暴で，いつも腹をすかせ食欲で，常に闘争的で，腐肉をあさっている等々の含意を Black は挙げている．そして，Black はそうした「狼」の体系がいわばフィルターとして機能し，それによって「人間」の食欲さや狂暴さが強調され，逆に他の属性や特徴は弱められることになるという．Black はこのようなフィルター，すなわち焦点の語にまつわる体系を通じての，焦点と枠組みとの属性対応のありかたを相互作用としてとらえている．そのような相互作用によって，単に「人間は獍猛である (Man is fierce)」や「人間は食欲である (Man is hungry)」といった表現では言い換えることができない，独特の効果やものの見方を担ったものとして「人間」の概念が再組織化されることになる Black はいう．

また，ここでいう焦点の語にまつわる体系について，Black はさらに夜の空を線状の透明部分を持つ濃い曇りガラスごしに覗くという例において説明を加えている．このとき目に映る星は予めそのスクリーン上にしつらえられた線の上に位置づけられるものだけである．その時，実際に見る星々はあたかもスクリーンの構造によって組織づけられたものであるかのようにみえる．つまり，Black はこの例で，メタファーをこのスクリーンと考え、焦点の語にまつわる体系をスクリーン上の線の模様と考えることができるとしている．

ここまで Black の相互作用理論について概観してきたが，Black のいう焦点語において連想される常識的な事柄の体系とは，すなわちベース領域であるといっただけであろう．しかも，その概念体系は場合によってはアドホックなものまで許容されるということから非常に柔軟なものであるととらえられている．こうした領域の柔軟性に関しては本研究においても前提されているものである．

また，肝心の相互作用理論については，端的に言えば，焦点語によって喚起されるベース領域と，それに対するターゲット領域とにおける属性対応による効果であるといっただけであろう．こうした属性対応によってターゲット領域が再組織化されるというのは一つのポイントである．本研究では，ベース領域の属性ではなく，論理構造や制約によってターゲット領域が再組織化，すなわ

ち再現されるという点に着目している。属性対応での再組織化では、表面的な類似しか構成できず、高次な関係まで扱えないことになる。そうしたことから、結果として、相互作用理論ではメタファーによって表面的な類似が生み出されるといった効果以上のことは議論できないことになり、いいかえるなら、それ以上の効果を持ったメタファーの事例は扱えないということにもなる。

2.2 Lakoff & Johnson (1980) の概念的隠喩論

Lakoff & Johnson (1980) は、メタファーとは一つ概念を他の概念によって理解することであるとした。メタファーを概念間の対応としてとらえる点では先程の Black (1962) とも共通している。ただ、Lakoff と Johnson は、体系的な事物理解をうながす認知方略であることがメタファーの本質であるとし、「時間」や「死」や「人生」等といった日常用いられている概念体系の多くの部分がメタファーによってこそ構造が与えられ規定されるとしている。そして、のちほど述べるメタファーの生産性という観点において示唆に富んだ議論を展開している (Lakoff & Johnson 1980)。例として、彼らが挙げている「Argument is war (議論は戦争である)」というメタファーをとりあげてみよう。

「Argument is war」

(議論は戦争である)

- ① Your claims are *indefensible*.
(君の主張は守りようがない)
- ② He *attacked every weak point* in my argument.
(彼は私の議論の弱点をことごとく攻撃した)
- ③ His criticisms were *right on target*.
(彼の批判は正しく的を得ていた)
- ④ I *demolished* his argument.
(私は彼の議論を粉砕した)
- ⑤ I *ve never won* an argument with him.
(私は彼との議論に一度も勝ったことがない)
- ⑥ You disagree? Okay, *shoot!*
(異論があるだと。よし、撃ってみろよ!)
- ⑦ If you use that *strategy*, he will *wipe you out*.
(そんな戦法じゃ、彼に粉砕されてしまうぞ)

- ⑧He *shot down* all of my argument.
(彼は私の議論をすべて撃破した)

図 2.1 メタファーの派生例 (1)

ここでは「議論は戦争である」というメタファーを基盤に、そこから様々な派生するメタファーが挙げられている。下線部は、この場合ベース領域にあたる「戦争」における記述である。文①, ②, ⑤, ⑥, ⑧においては、「敵」である相手からの批判や反論は「攻撃」を受けることであり、そうした攻撃から自分の議論の立脚点を「守ら」なければならず、守りきれないと敵に「撃破」され「負ける」ことになる。文③においては、特に批判や反論が的確なものであれば、見事に「命中」したことになる。文⑦においては、相手に勝つにはそれに相応な対策、すなわち「戦略」を立てることが重要であるということになる。これらのメタファーでは、単に戦争の言葉を使用して議論のありさまを語っているというだけではない。戦争という視点から議論をとらえ、議論における行為のある側面を戦争における行為によって体系的に対応づけ、それによって議論における我々の行動の仕方やもののとらえ方を意義づけているといえる。こうしたことから、Lakoff と Johnson は戦争というメタファーによって議論という概念に構造が与えられているとする。

また、勿論こうしたメタファーによる概念の構造化は一通りではない。例えば、同じ「議論」という概念について Lakoff と Johnson は次のようなケースも挙げている。

「An Argument is a container」

(議論は容器である)

- ①Your argument doesn't have much *content*.
(君の議論には十分な内容がない)
- ②That argument *has holes in it*.
(その議論は穴があいている)
- ③Your argument is *vacuous*.
(君の議論は空虚だ)
- ④You won't *find* that idea *in* his argument.
(彼の議論の中にはその考えはみつからないだろう)
- ⑤Your argument won't *hold water*.

(君の議論は水を漏らす)

図 2.2 メタファーの派生例 (2)

「議論は容器である」というメタファーから、様々なメタファーが派生している点については、前出の「議論は戦争である」の例と一緒にある。ただし、視点が明らかに異なっている。ここでは、「容器」という観点から「戦争」がとらえられている。

こうした例から、メタファーの派生は概念の体系にのっとった一貫性をもったものであると Lakoff と Johnson は指摘する。こうした概念の体系性を利用することによって、一つのメタファーから様々なメタファーが生産されることになる。こうした Lakoff と Johnson の概念的隠喩論におけるメタファーの生産性についての議論と、本研究での継承記述との関わりについては次節において比較・検討してみたい。

2.3 継承記述とメタファーの生産性

まず、Lakoff と Johnson のメタファーの生産性についての議論と、本研究での継承記述の議論との共通点は何かという点、ある一つのメタファーの成立が契機となり、そこから一貫性をもったメタファーの派生や生成が可能であることに着目している点である。その背景には、概念間の構造的対応というものが前提されている。

ただし、大きな相違点が3つある。まず一つは、メタファーの継承記述とは、Lakoff と Johnson のメタファーの派生という議論からさらに進んで、そうしたメタファーの派生をさらに利用した記述や表現のありかたであるという点である。

二つめは、ベース及びターゲット領域間の構造的対応について、本研究ではそうした領域間で対応する構造の形成に遠隔推論が関わっていることに着目し、推論における制約構造に焦点を絞って議論している点である。それに対して Lakoff と Johnson の議論においては、推論のありかたについては十分に考慮および明示化されておらず、むしろ結果としてベースとターゲットとの領域間でどのような要素同士が対応づけられ、そしてどのように対応が広がっていくかといった、いわばメタファーによる表現の豊かさが強調されているといえる。

三つめは、メタファーの継承記述というものが、従来のメタファー研究においても十分に議論されていない、ベース及びターゲット領域における記述の表

出のありかたについて議論を提起している点である。こうした、継承記述の議論と従来のメタファーの生産性についての議論との3つの相違点において、メタファーの継承記述という現象を研究することの意義が見出されるといってよいであろう。

第 3 章

類 推 写 像 理 論

従来、メタファー研究においては、ある隠喩文を理解する際にどのような既存知識がどのように運用されているのか、いいかえればベース領域からターゲット領域へ、どのような内容がどのように写像されるのかといった類推写像原理の解明こそが中心的課題の一つとなってきたといえる (Lakoff & Johnson 1980, Lakoff & Turner 1989, Indurkha 1993). そうした意味においては、言語表現のみならず広く類推的思考一般を扱うアナロジーの理論的研究 (Gentner 1983, Gentner & Gentner 1986, Holyoak & Thagard 1995, 鈴木 1996) との関わりも深いといえる.

この章ではメタファーおよびアナロジーの先行研究における代表的な 3 つの類推写像理論である、Lakoff & Turner (1989) の写像理論, Indurkha (1993) の相互作用理論, ならびに Gentner (1983) の構造写像理論について概観する.

3.1 Lakoff & Turner (1989) の写像理論

概念の構造的性を重要視し、メタファーを構造的な写像としてとらえる Lakoff & Turner (1989) の理論をとりあげてみよう.

まず、Lakoff と Turner は「A は B である (A is B)」というメタファーを考えた場合、ベース領域 B, すなわち隠喩として使われている B についての知識構造の一部がターゲット領域 A へと写像されるとしている. 彼らが挙げている「人生とは旅である」の例で考えてみよう. Lakoff と Turner は、人生を旅として理解することは、ある対応関係、例えば旅人と人生を送る者、人生の目的と旅の到達点、人生の選択と道の交差点などといった結びつきを、心の中に描くことであるとしている. そして、このように人生を旅として理解することは、人生について一様で単純な概念化にとどまらず、内容が豊富で多様なとらえかたを可能にしているとする.

こうした理解の多様性を可能にする要因を Lakoff と Turner は 2 つ挙げている. 一つは、知識のもつ抽象性である. 我々の旅についての知識は、異なった種類の旅の中からどれかを選ぶ余地を含んでおり、そのため旅という枠内で人生についての様々な理解を可能とするような選択肢が存在するというのである. そしてもう一つは、写像能力である. 旅というものについて我々がもつ知

識の構造は、旅人、出発点、終着点、旅路、障害といった細分化された要素からなっていると Lakoff と Turner はいう。そのうちのあるものは不可欠であったり、またあるものは目的地、乗り物、同伴者、案内人などのようにあったりなかったりする。このように、骨組みのような形で構造化された知識を Lakoff と Turner は「認知図式」、あるいは単に「図式」と呼び、さらにその枠組みを満たす要素を「役割」と呼ぶ。すると、旅という図式中には、旅人という役割があり、それは旅路にある何らかの人物によって演じられる。見方をかえれば、旅人という概念自体、旅との関連によってのみ規定されるものといえる。旅人とは、この意味では、旅という図式の中で旅人の役割を満たしている人物と理解される。

したがって、人生は旅であるというメタファーは、旅という認知図式のもつ構造を人生という概念領域へと写像し、その結果として、それぞれの図式中における役割同士、例えば、旅人と生活者、出発点と生誕等の対応がなされると Lakoff と Turner はいう。

そして、さらに Lakoff と Turner はこうした写像を以下に示す4つのありかたにおいてとらえている。

1. 役割写像
2. 関係写像
3. 性質写像
4. 背景知識写像

まず、役割写像とは、ベース領域の図式中の役割がターゲット領域中の役割へと写像されるというものである。Lakoff と Turner によれば、特にターゲット領域の中には役割が写像によって創り出される場合もあるとする。例えば、旅という図式の中から、経路という役割を人生の領域に写像するということは、人の一生をある経路をもったものとして理解することにつながり、ここから人生という領域に、人生の道筋といった概念が必然的に創り出されると考えられる。

関係写像とは、ベース領域内の役割間の関係がターゲット領域内の役割間の関係へと写像されるというものである。Lakoff と Turner によると、例えば、旅人が予定の目的地へと到着しつつあると考えてみる。これは人間が人生の目標を達成しようとしているのに対応する。つまり、Lakoff と Turner は、旅人と目的地との間に成り立つ「到着」という関係が、人間と目標との間に成り立つ「達成」という関係に写像されるということである。

性質写像とは、ベース領域内の要素がもつ性質がターゲット領域内の要素の性質に写像されるというものである。Lakoff と Turner によると、例えば、旅人は道行きを定めたり障害に立ち向かったりするうえで様々な強み・弱みをもっている。これは人生の場合には行方を定め、問題に対処するうえでの強み・弱みに対応する。したがってある人物が旅の行く手に立ちはだかるいかなる障害にも打ち克つ強さを持っているという場合、このメタファーは、その人が人生の様々な困難に対処しているさまを伝えているということになる。

背景知識写像とは、ベース領域の背景的な知識がターゲット領域の背景的な知識へと写像されるというものである。Lakoff と Turner によると、ある領域についての知識は、その枠内で推論をめぐらすことを可能にする。一つの領域が写像の基礎となると、そこでの推論のパターンはターゲット領域へと写像される。例えば、行き止まりにぶつかったらその方向に進むことはできず、別の道を探さなければならない。同じく人生の中で行き止まりにぶつかるということは、別の行動をとらなければならないということになる。Lakoff と Turner がここでいう背景知識とは、領域内の個々の役割や関係、及びそれらを導く推論のパターンを含めたものであるということができる。

Lakoff と Turner はこれらの写像のあり方において、あくまで部分的な構造の対応であり、写像の方向性はベース領域からターゲット領域への一方向のみに限るものであることを強調する。特に、双方向の写像が成立するとすると、メタファーにおけるもののとらえかたや見立てというものが反映されず、「A is B」というメタファーと、「B is A」というメタファーとの区別がなくなってしまう、どちらにせよメタファーの意義は A と B との共通点を拾いあげるだけになるからである。「人生は旅である」の例で考えると、双方向の写像が成立しているとなると、旅について語る際に慣習的に人生についての言葉で語ることもできようし、誰かが旅行する時には、「あの人は生まれた」という表現によって「あの人は旅に出た」という意味を慣習的に表すこともできていいはずであると Lakoff と Turner は指摘する。そして、実際にそのようになっていないのは、写像があくまで一方向的であるからとしている。勿論、ベース領域とターゲット領域とを入れ換えてもメタファーが成立する場合はあるが、それは双方向的な写像というのではなく、それぞれ異なった要素が写像される別々のメタファーであると Lakoff と Turner は指摘している。

ここまで、Lakoff と Turner の写像理論を概観してきたが、メタファーというものの意義やあるいはメタファーと推論との関わりについて議論されている点は示唆に富んでおり興味深いものといえる。ただし、特に写像や推論の働きに関しては、より精密な議論が必要であると考えられる。Lakoff と Turner が定義

している「認知図式」や「役割」という概念についても必ずしも明確なものではなく、そこから類推写像の精密なモデル化への展開は困難であると考えられる。

3.2 Indurkha (1993) の相互作用理論

第2章でとりあげた Black (1962) の相互作用理論においては、メタファーを認識のありかたとも絡めながらも、あくまで言語もしくは表現の問題として議論がなされた。それに対して Indurkha (1993) は、メタファーという言語現象を、認知主体の思考や行動一般を包括する議論の中で位置づけようと試みる。メタファーを含め認知主体の認識や行為のありかたを、主体とそれを取り巻く外界（環境）との相互作用において説明づけようというものである。

本研究では、メタファーの継承記述という現象を扱うものであり、認識や行為のありかたまでを議論するものではない。ただし、写像理論としては Indurkha のモデルは領域構造の表現等において、具体性を持った興味深いものであるといえる。そうしたことから、本節では、Indurkha (1993) の相互作用理論をとりあげる。

Indurkha は、相互作用をなす対の一方を認知主体の「内的表象 (internal representations)」, もう一方を「現実世界 (reality)」としてとらえ、さらにそれらの対応のありかた、すなわち相互作用を「認知関係 (cognitive relations)」としてとらえている。Indurkha のいう内的表象、現実世界、認知関係とは何なのかを順を追って議論していきたい。

内的表象のモデルについては、認知言語学、認知心理学といった学問領域においても様々に提案されているが (Indurkha 1993), Indurkha はこの内的表象を「概念ネットワーク (concept networks)」としてとらえ、ある一つ概念ネットワークは、シンボル (symbols) と、それらを結びつけ特徴づけるオペレーター (operators) とのそれぞれの集合からなるものとして定義している。ここでは概念ネットワークは操作可能なシンボリックなシステムとしてとらえられている。また、Indurkha は特に概念ネットワークが満たすべき次に挙げる3つの基準があるとする。

1. オペレーターの集合は有限 (finite) でなければならない。
2. 全てのオペレーターは物理的に実現可能 (physically realizable) なものでなければならない。
3. 概念ネットワークは有限的に生成されるもの (finitely generated) で

なければならない。

Indurkhyia によれば、これらの基準の意義は、認知主体の表象能力が有限 (finite representability) であることを保証することにあるとしている。

Indurkhyia が挙げている「家族 (family)」の概念ネットワークの例をとりあげてみよう。「家族」という概念ネットワークは、例えば、「産む (gives birth to)」、「育てる (nurtures)」、「遺伝物質を寄与する (contributes genetic material to)」といった、基準 1 及び 2 を満たす、物理的な操作をおこなう有限なオペレーターの集合からなる。そしてそれらのオペレーターによって「母親 (mother)」というシンボルから「子供 (child)」というシンボルが導出され、特徴づけられることになる。ただし、「家族」という概念ネットワークは、基準 3 にあるように、あくまで有限に生成されるものである。Indurkhyia によれば、我々はどうした概念ネットワークを用いることによってはじめて現実世界を有意味に構成し、理解できるとしている。概念ネットワークによって世界に属性を、そして構造を創造し与えることが可能になるというのである。

次に、内的表象に対置する現実世界についてであるが、現実世界を議論するにあたり Indurkhyia は一つの問題と向き合うことになる。それは、概念ネットワークによってこそ現実世界が有意味に構成される、あるいは現実世界に構造が与えられるとした場合に、いかに現実世界の自律性というものを確保し、概念ネットワークによる、独断的ではない適正な世界の構成を保証するかということである。そこで、Indurkhyia は現実世界を 3 つのレベルに階層分けし、さらに精密な議論を展開している。

まず、Indurkhyia は第 1 レベルの世界は、認知主体には本来的にはアクセスできない、すなわち語り得ない世界であるとする。言うなれば、「物自体 (things-in-themselves)」の世界であると Indurkhyia はいう。ただし、そこで Indurkhyia はこの第 1 レベルの世界を、認知主体にはアクセスできないものの、「心と独立な自律構造 (mind-independent autonomous structure)」をもった世界としての基礎づけを提案する。また、ここにおいても、認知主体が現実世界に対して、心と独立な自律構造としての存在を与えることができない、あるいはそれを自覚することができないのにもかかわらず、なぜそうした自律構造を仮定することができるのかといったパラドキシカルな問題が浮上してくる。だが、それに対しての Indurkhyia の見解は、その自律構造の何たるかを明確化する必要がないかぎりにおいて、心と独立な自律構造としての存在を与えることなしに、我々はそうした自律構造を仮定できるというものである。このことは、ちょうど数学の存在証明において、いくつかの数学的対象の存在が、その対象の何たるか

が明確化されることなしに証明されるということに似ていると Indurkha は述べている。

第2レベルの世界は、感覚印象的世界であるとされ、Indurkha によって「感覚運動データ群 (sensorimotor data set)」と呼ばれている。このレベルの世界は、我々の感覚および運動器官が第1レベルの世界から「刺激 (stimuli)」を受け、そして産み出される「生の感覚データ (the raw data)」によって形成されるものである。こうした知覚的相互作用によって第1レベルの世界がはじめて顕示されることになる。

第3レベルの世界は、概念的世界であるとされ、Indurkha によって「環境 (environment)」と呼ばれている。環境とは、感覚運動データ群に対して概念ネットワークによって構造が与えられ形成されるものである。Indurkha は、ここでも、こうした構造の形成のある部分は認知主体の物理学的、生物学的構造によって方向づけられるが、逆に認知主体によってある同じ感覚運動データ群に異なる構造を与える、すなわち異なる解釈を与えることもできるという相互作用が成立するとしている。さらに Indurkha は、ある一つの環境を「オブジェクト (object)」と「変換 (transformation)」のそれぞれの集合からなりたつものとして定義している。ただし、ここでの集合については、環境が自律的構造をもったものであるという点から、有限とするか無限とするかについては特に規定は加えないとしている。オブジェクトとは、概念ネットワークにおけるシンボルに対応し、変換とは概念ネットワークにおけるオペレーターに対応するものとされる。これは環境が概念ネットワークによって解釈され、構成されることによるものである。また、この節の冒頭で述べた、概念ネットワークと認知関係が成り立つとされるのは、現実世界のこの第3レベル、すなわち環境である。

ここまでで述べてきた概念ネットワークと環境とを対応づけるのが、認知関係である。Indurkha によれば、認知関係によって、概念ネットワークが有意味のものとなり、また環境に対して認知主体による能動的な働きかけが可能になるとされる。

認知関係とは、ある概念ネットワークと環境とにおける、シンボルとオブジェクト、およびオペレーターと変換とをそれぞれ対応づける、いわば対応関係として定義される。そしてそれぞれの対応については一対一 (one-to-one) 対応のみならず、一対多 (one-to-many)、多対一 (many-to-one)、多対多 (many-to-many) 対応を許容するものとしている。ただ、制約として n 項のオペレーターは n 項の変換に対応づけられるとしている。ここで Indurkha の自然数の例をとりあげてみよう。石の山からなる、ある環境があるとする。数字が概念ネッ

トワークにおけるシンボルであり、それぞれの石の山がオブジェクトである。そして全ての石の山に石の個数に応じた数字が割り振られているとする。ここで「加算 (addition)」という概念ネットワークにおけるオペレーターは、環境において2つの山を一緒にし、新しい一つの山を作る「結合 (combining)」という変換に対応し、またシンボルである数字とオブジェクトである石の山が対応している。こうした概念ネットワークにおけるシンボル操作と環境における物理的操作とを対応づけるのが認知関係であるといえる。

このような認知関係において Indurkha によって重要視されているのが「一貫性 (coherency)」および「部分的な一貫性 (locally coherency)」である。Indurkha は部分的な一貫性の方がより重要であるとしている。その理由として2つ挙げられている。一つは、我々の日常生活に即して考えた場合、我々は認知関係、すなわち対応関係において部分的な一貫性のみを必要とすることが多いということであり、またもう一つは、認知主体の表象能力が有限 (finite representability) であるということである。

そして、Indurkha はそうした認知関係における一貫性および部分的な一貫性を保持するための、2つの異なるタイプの認知メカニズムの存在を指摘している。それが「適応 (accommodation)」と「投影 (projection)」である。

適応とは、環境との対応関係は保ったままで、それに合わせて概念ネットワークの構造を組み替えるというものである。Indurkha はこうした適応の例として、地図を書く作業を挙げている。地図を書く際には、すでに現実世界において地形が存在しており、その地形との対応をとるように地図を書く、すなわち一貫性を保つように概念ネットワークを構造化していくことになるからである。

一方、投影は逆に、概念ネットワークの構造は保ったままで、それに合わせるように環境との対応関係をとっていくというものである。Indurkha は投影の例として、緯線と経線というものを挙げている。緯線も経線も、現実世界にそのまま存在しているものではなく、我々が位置を把握するために考案した、いわば概念的な参照システムといえる。つまり緯線と経線という参照の枠組みを環境に投影し、それによって実際の位置関係との対応関係をとっているといえる。

Indurkha によれば、メタファーとは特にこの投影というメカニズムによる非慣習的 (unconventional) な見立てによって成り立つものとしている。いうなれば、概念ネットワークがベース領域で、環境がターゲット領域ということになり、領域同士の対応づけがここでの認知関係ということになる。

こうした概念ネットワークによる領域表現は、シンボルとオペレーターとによって精密におこなうことができ、また領域の拡張についても数学的にしかも

我々の表象能力の有限性を考慮した形で可能であることから、数学的モデルとしては有望であるといえる。

ただし、Indurkha の議論の場合、あくまで概念ネットワークと現実世界との対応に焦点が当てられているため、写像に関しては、オペレーターと変換、シンボルとオブジェクトとの対応にとどまっている。よって、オペレーター間の関係といった、より高次の関係、もしくは現実世界において物理的な実現が困難な抽象的思考については十分に扱えないということになる。メタファーはこうした抽象的な思考に関わる場合が少なくないと考えられる。

3.3 Gentner (1983) の構造写像理論

これから述べる Gentner (1983) の構造写像理論 (structure mapping theory) とは、アナロジー研究における一つの代表的な写像理論である。Gentner が提唱している構造写像理論の大きな特徴は2つある。一つはシステムとしての領域表現であり、もう一つは、そうした領域表現に基づいたベース領域からターゲット領域への翻訳規則、すなわち写像規則である。

まず、領域表現について、Gentner は両領域を「オブジェクト (object)」と「述語 (predicate)」から構成されるシステムとしてとらえている。このオブジェクトと述語とを用いて、「属性 (attribute)」と「関係 (relation)」とを表現する。例えば、「COLLIDE (X, Y)」という記述において、まず X, Y がそれぞれオブジェクトであり、COLLIDE が述語となる。特にこの場合、X が Y を「衝突する (COLLIDE)」という関係を表現していることになる。また、例えば、「RED (X)」という記述は、オブジェクト X の属性、この場合なら「赤い (RED)」を表現していることになる。

そして、実はこのような関係および属性の表現は、述語構造のみから明確に区別することができる。Gentner はいう。Gentner によれば、1 項の引数をとる述語が属性を表現しており、2 項以上の引数をとる述語が関係を表現しているとしている。

また、Gentner によれば、述語構造においてさらにもう一つ重要なことは、関係の次数 (order) であるとする。例えば、例に挙げた「COLLIDE (X, Y)」はオブジェクトを引数としている。それに対して、引数が関係であることも考えられる。例えば、「CAUSE {COLLIDE (X, Y), STRIKE (Y, Z)}」という記述においては、「衝突する (COLLIDE)」という関係と「ぶつかる (STRIKE)」という関係との間に成立している「引き起こす (CAUSE)」という関係を表現していることになる。つまり、関係間の関係を表現しているといえる。Gentner

はオブジェクトのみを引数とする関係を「1階の関係 (first-order predicates)」とした場合、1階以上の関係を引数とする関係を「2階の、もしくは高階の関係 (second- and higher-order predicates)」としている。こうした高階の関係については、後に述べる構造写像理論の写像規則において特に重要な意味をもつことになる。このように構造写像理論の領域表現においては、述語の引数の数および階数といった述語構造のありかたが重要となる。

構造写像理論の大きな特徴のもう一つは、ベース領域からターゲット領域への写像規則にある。Gentnerによれば、次に挙げる3つの原理を満たす写像を適切な写像としている。また、以下の原理の説明で使用されている、左から右への矢印「 $\longrightarrow$ 」はベース領域からターゲット領域への写像を示しており、逆に「 $\longleftarrow$ 」は写像が成り立たないことを示している。さらに、使用されている記号について、「 b_n 」および「 t_n 」は、それぞれベースおよびターゲット領域内のオブジェクトを、「 R 」は関係の述語を、「 A 」は属性の述語を、そして「 R 」は高階の関係述語をそれぞれ示している。

1. 属性の非写像 (Discard attributes of objects)

構造写像理論においては、対象の属性は必ずしも写像されないとする。

$$A(b_i) \longleftarrow A(t_i)$$

2. 関係の保持 (Try to preserve relations between objects)

ベース領域で成立しているある関係 R が存在するなら、ターゲット領域での対応するオブジェクト間にも同一の関係 R が成立する。

$$R(b_i, b_j) \longrightarrow R(t_i, t_j)$$

3. システム性の原理 (The systematicity principle)

高階の関係が優先的に写像される。あるいは関係の相互制約を持った系に属している関係の方がターゲット領域に写像されやすい。

$$R(R1(b_i, b_j), R2(b_k, b_l))$$

$$\longrightarrow R(R1(t_i, t_j), R2(t_k, t_l))$$

原理2の関係の保持について、オブジェクトならびにオブジェクトの属性ではなく、関係構造が保持されるということから、Gentnerはアナロジーを表面的な類似性にもとづくものとしてではなく、関係構造の類似性にもとづくものと

してとらえているといえる。

原理3のシステム性の原理について、Gentnerはアナロジーの成立においては高階の関係というものを暗黙的に踏まえた、抽象的思考の働きが大きく関わっていることに着目しているといえる。また、Gentnerは高階関係の例として因果関係を挙げている。

ここで、Gentnerがこうした3つの原理にのっとって解釈をおこなっている次の例を考えてみよう。

例。「水素原子は太陽系のようなものである (The atom is like the solar system)」

Gentnerによれば、このときベース領域およびターゲット領域は次のように定められる。

ベース領域：太陽系の構造

ターゲット領域：原子の構造

まず、原理1より、太陽や惑星の色や温度といったオブジェクトの属性は写像されない。

次に原理2によって、ベース領域における関係述語が写像候補となる。写像候補となるベース領域における関係群として、Gentnerは「太陽 (sun)」と「惑星 (planet)」というオブジェクト間に成り立つ次の4つの関係、「引きつける (ATTRACTS)」、「より重い (MORE MASSIVE THAN)」、「周りを回転する (REVOLVES AROUND)」、「より熱い (HOTTER THAN)」を挙げている。Gentnerはこうしたベース領域における関係群を次の図3.1で示している。

な状況を説明したり，議論したりすることの多いメタファーを扱える理論にまで拡張するのは難しいと考えられる．

3.4 まとめ

ここまで，メタファーおよびアナロジーの先行研究における代表的な3つの類推写像理論について概観してきた．特に高次の関係の写像が扱える Gentner の構造写像理論は，継承記述における制約写像の議論との関わりが深いと考えられる．継承記述における制約写像との比較については，第5章においてあらためて議論する．

第 4 章

メタファーの継承記述の 카테고리

この章では、事例分析を踏まえた、メタファーの継承記述のカテゴリを提示する。

4.1 継承記述の再定義

事例分析にあたって、メタファーの継承記述というものをあらためて次のように定義したい。

- ・テキストにおける文と文との間で、共通するベース領域が引き継がれて記述されているもの。

こうした定義のもと、談話の中から該当する箇所を抽出し、各文に下線および下線番号を施し分析をおこなっていくものとする。本研究ではメタファーの継承記述において、特に遠隔推論が成立している事例に焦点をあてる。

また、こうした定義に対して、記述表出のパターンからいえば、ベース領域の記述が連続して出現している箇所はもちろんのこと、両方の領域が混在して表出している文が続いているものや、ターゲット領域の記述の文を挟んで飛び石的にベース領域の記述の文が展開していくようなもの等、様々な記述表出のパターンが考えられる。

4.2 記述表出パターンの分析

記述表出のパターンとは、どの領域の記述がどのような順番で、そしてどのような効果および役割を担って出現しているかということである。継承記述の中で、一つの文において、継承される隠喩的な言語使用と字義的な言語使用とが混在して表出しているものを「混在記述 (mixed description)」と呼ぶこととする。また、ある一つの記述によってベース及びターゲット領域の双方における事柄を一度に表現できるものもある。こうしたものを特に「収束記述

(converging description)」と呼ぶこととする．特にこの収束記述に着目しながら，記述表出のパターンを分析していく．

記述表出のパターンについては，図 4.1 に示す図式を用いて表現する．このとき「B」，「T」の記号は，それぞれベース領域（Base-domain），ターゲット領域（Target-domain）の略称である．継承記述において想定されているベースおよびターゲット領域は，継承記述内の文もしくは談話全体から推定される．また，抽出された継承記述，もしくは継承記述を含んだ談話の中で，各文がどの領域の記述の文であるのかを，文番号が「B」，「T」どちらの側にプロットされているのかで示す．矢印は，出現する文の順序を表している．

<記述表出のパターン>

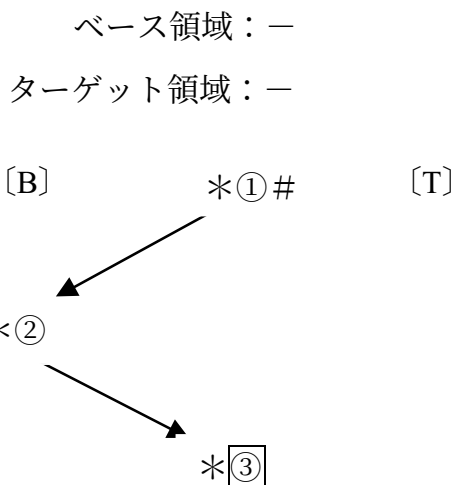


図 4.1 記述表出パターンの表現図

継承記述と判断される箇所については，図 4.1 の①から③のように，文番号の左横に「＊」のマーキングを施すものとする．混在記述および収束記述であるものは，図 4.1 の①および③のように中間地点にプロットされる．また，継承記述の開始点においてベース領域とターゲット領域との対応づけの契機となっているものを，特に「橋渡し記述（Bridging description）」と呼び，図 4.1 の①のように文番号の右横に「#」のマーキングを施すものとする．橋渡し記述が存在する場合は，継承記述において想定されているベースおよびターゲット領域を推定することが容易となると考えられる．ただし，こうした橋渡し記述は継承記述における必要条件でも十分条件でもない．また，収束記述については，図 4.1 の③のように文番号を四角で囲んで表記するものとする．

4.3 制約構造の分析

遠隔推論 (Reasoning at a Distance) とは、本来 Barwise と Seligman とによって定義づけられた情報論における用語である (Barwise & Seligman 1997). ある対象 a について推論する時に、別の対象 b に a を表現させておいて、b について推論をおこなうことで、間接的に a について推論をおこなうというタイプのものである。下嶋 (1998) によれば、具体例として、ある社会情勢について考えるために特定の統計を取ってグラフを作り、そのグラフそのものの性質について考える場合や、ある川に堤防工事を施した後の水流を予測するために、その川のモデルをつくってモデルの性質を調べる場合、さらに身近な例として、ものを数えたり計算するときに指を使う場合などが該当するとされる。こうした遠隔推論の有効性は、表現される対象 a に関する制約が、表現する対象 b に関する制約によってどの程度まで再現されているかに大きく左右されることになる。本稿での議論でいうなら、ターゲット領域における制約が、ベース領域によってどこまで再現されているかに依るということになる。

遠隔推論の一つの大きな特徴は、ベース領域で成立する制約にのっとった推論によって、ターゲット領域での状況把握や事態予測というものを有効におこなえるということである。先程挙げた、水流予測の例のように、物理的にも直接ターゲットを扱うことが困難である場合や、あるいは指で計算する例のように、ベース領域での論理構造の方がより馴染み深く、扱いやすい場合などには特に遠隔推論は有効なものとなる。

本研究では、こうした遠隔推論における議論を踏まえ、継承記述について、ベース領域で成立しターゲット領域へと写像される制約構造による次の4つの分類を提示したい。

1. 帰結 (consequence) の制約写像
2. 非帰結 (non-consequence) の制約写像
3. 無矛盾 (consistency) の制約写像
4. 矛盾 (inconsistency) の制約写像

まず、帰結とは、ベース領域において、ある事象 p のもとである事象 q が必ず成立することを結論するものである。

非帰結とは、ベース領域において、ある事象 p のもとである事象 q が必ずしも成立しないことを結論するものである。

無矛盾とは、ベース領域において、ある事象 p のもとである事象 q が矛盾し

ないことを結論するものである。

矛盾とは、ベース領域において、ある事象 p のもとである事象 q が矛盾することを結論するものである。

事例分析においては、この帰結、非帰結、無矛盾、矛盾の4つの制約構造がターゲット領域へと写像されている事例を挙げながら議論していくものとする。制約構造については図 4.2 に示す図式によって表現する。

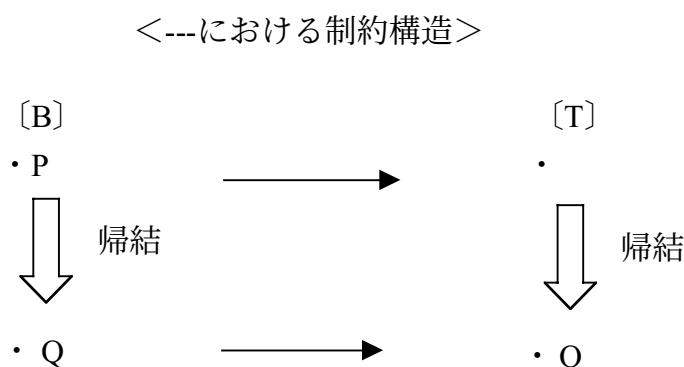


図 4.2 制約構造の表現図

図 4.2 における「B」、「T」の記号は、図 4.1 の場合と同様、それぞれベース領域、ターゲット領域の略称である。まず、継承記述の中から、ベース領域の事象 P、Q 間で成立している制約構造、特に文脈の中で核となっているもの、つまり論証の中で重要であると考えられる制約構造に対し、帰結、非帰結、矛盾、無矛盾のどのパターンがあてはまるのかを図 4.2 の PQ 間の矢印とともに記す。また、そうした制約構造がどの文もしくは文間において成り立っているのかを、例えば、「<文②における制約構造>」とその文番号を示して明記する。そして、事象 P、Q 間の制約構造を用いて、その意味内容、すなわち本来述べようとしている事柄をターゲット領域において再現することになる。そしてその結果、ターゲット領域における結論がどう導かれるかが重要な問題といえる。このとき図式的には、PQ 間における制約構造は P Q 間においても保存され、事象 P は事象 P へ、事象 Q は事象 Q へと写像されることになる。ちなみに、事象 P に、前提となる事象をさらに付加し、事象 Q を結論するような場合には、「+」という記号を用い、前提の付加を表すものとする。また、領域間における事象間、すなわち PP 間、QQ 間の矢印はあえてベース領域からターゲット領域への片方向のみとした。これはベース領域からターゲット領域へという写像の方向性を考慮したためである。

また，継承記述の意味内容を再現する作業には，全体の文脈を考慮しながら，必要に応じて表出されていない背景的な情報や知識をも読み手が補完しなければならない場合がある．そのような大幅に補完が必要な記述については特に括弧でくくることとする．

4.4 事例分析

分析事例については、小説、随筆、新聞の社説、あるいは対談やインタビュー記事等から収集した。次節以降、遠隔推論において成り立っている制約構造ごとに、特徴的な個々の事例について分析していくものとする。

4.4.1 帰結の制約写像

〔事例 1〕

「二世とか三世の俳優って、周囲からよく「親を追い越せ」って言われるけど、そういうふう考えたこと一度もないんです。おやじは絶対に追い越すべきじゃないって思ってますから。

（中略）質問しなければ何も教えてくれないけど、何か尋ねると、いろいろな話が飛び出して、驚いちゃうようなことが山ほどある。

でも、子どもに考えを押しつけるようなことはなかった。

（中略）最近、本当の意味で頼りがいのある人だと思います。大事なところをきちっとおさえていて、どうでもいいことを一大事のように騒ぎもしない。器用ではないけれど、目的に対するアプローチは愚直そのもの。

①. おやじはおれの「灯台」です。 ②. 灯台に船を直接つけるわけじゃない。
③. でも灯台が立っているから、船は遠くにいてもどっちに進めばいいか意志決定ができる」

（インタビュー記事「おやじのせなか」。朝日新聞朝刊 2000 年 12 月 18 日付）

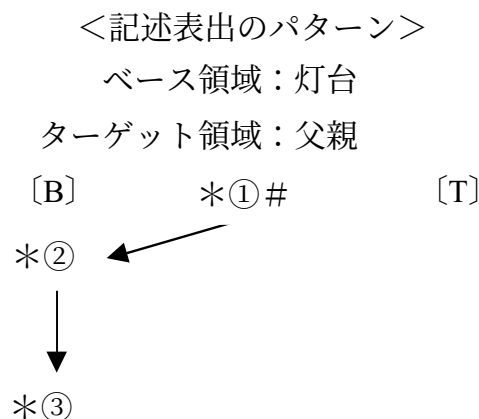


図 4.3 事例 1 における記述表出パターン

＜文③における制約構造＞

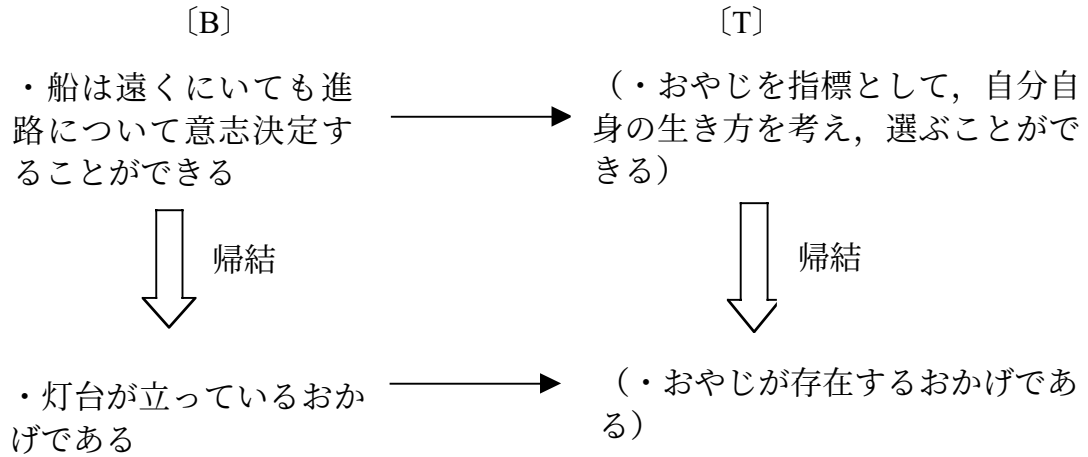


図 4.4 事例 1 における制約構造

まず、図 4.3 の記述表出パターンから、この事例は一つの典型的な継承記述の表出パターンであるということが出来る。まず、文①「おやじはおれの『灯台』です」において、ターゲット領域である「おやじ」に対して、「灯台」というベース領域を対応させていることが明示されている。この時、文①は橋渡し記述であるといえる。さらに、そうした灯台というベース領域を継承して、文②「灯台に船を直接つけるわけじゃない」、文③「でも灯台が立っているから、船は遠くにいてもどっちに進めばいいか意志決定ができる」とベース領域の記述が続いていくことになる。

このとき継承記述の中で、強い主張としては明らかに文③が該当すると考えられることから、文③における制約構造が分析されることになる。

図 4.4 に示される制約構造から、帰結の制約写像が確認できる。橋渡し記述である文①、および文③を手掛かりとしたベース領域での前提事象「船は遠くにいても進路について意志決定することができる」と結論事象「灯台が立っているおかげである」との間の帰結の制約構造がターゲット領域へと写像され、ターゲット領域において「おやじを指標として、自分自身の生き方を考え、選ぶことができる」と「おやじが存在するおかげである」との間の帰結が成立することになる。橋渡し記述の存在と遠隔推論の成立とによって、限られた記述表出から有効にターゲット領域での帰結関係が導き出されるということがわかる。

〔事例2〕

①自民党政治では今日の危機を乗り切ることができず、すべてが行き詰まってしまった。②昨年六月の総選挙で、国民は自民、公明両党に過半数を与えたが、自民党自体は大きく議席を減らした。③もう変えなくちゃだめだという国民の（意識の）兆候が現れている。④古い家が風雪に耐えられなくなっている。⑤取り壊し、新しい家を建てる以外ない。

（「小沢一郎・自由党党首インタビュー」．朝日新聞朝刊 2000 年 1 月 12 日付）

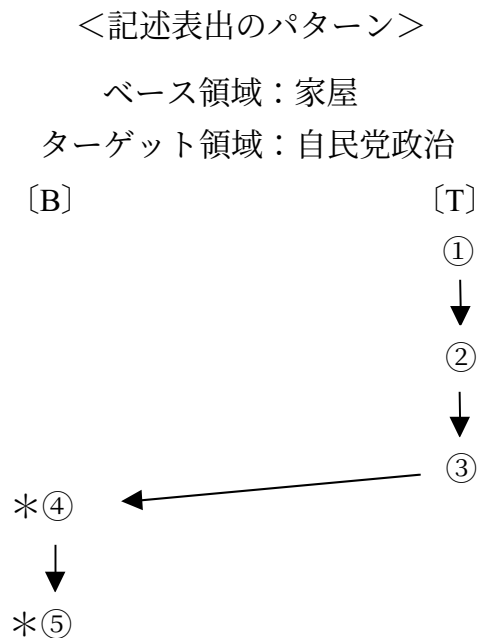


図 4.5 事例2における記述表出パターン

＜文④から文⑤における制約構造＞

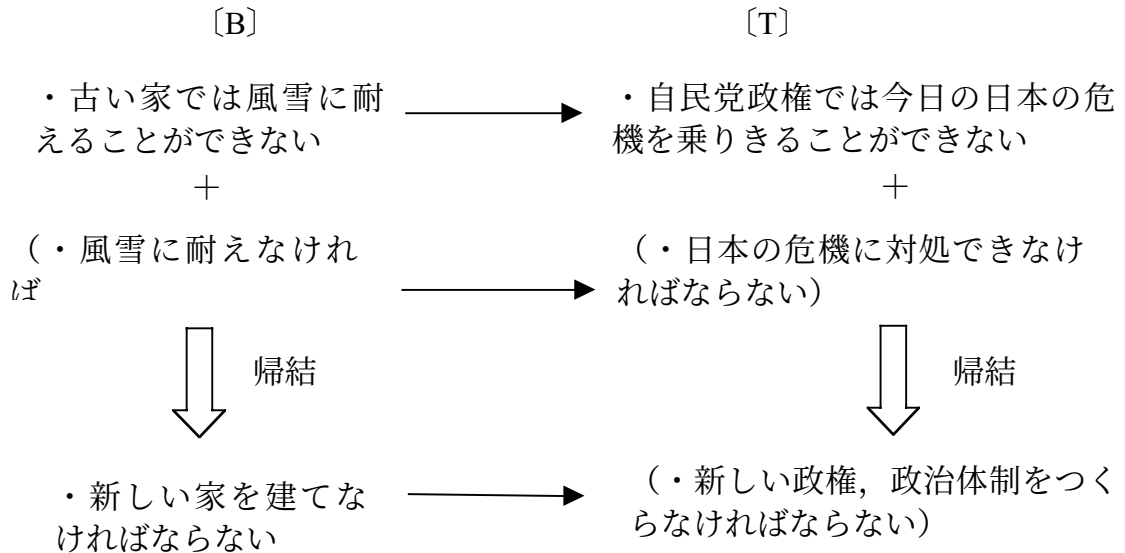


図 4.6 事例 2 における制約構造

図 4.5 の記述表出パターンから、この事例は橋渡し記述の存在しないものであるということがわかる。すなわち、ターゲット領域からベース領域へと突然記述が移っている。このようなパターンが一般的に有効であるためには、恐らく次の 2 つの条件が必要であると考えられる。一つは、継承記述に至るまでのターゲット領域の記述が、その後に出現するメタファーの継承記述からターゲット領域との意味的な対応関係をとるのに十分な情報量を提示しているということである。そして、もう一つは、この場合でいうなら古い家屋というたとえ、すなわちベース領域が、理解しやすく馴染み深いものであるということである。こうした条件をクリアしていれば、ターゲット領域の記述から橋渡し記述なしにベース領域の記述、すなわち継承記述へと移行しても読み手の理解を阻害する可能性は低いと考えられる。

ところで、この事例 2 は、継承記述である文④「古い家が風雪に耐えられなくなっている」から文⑤「取り壊し、新しい家を建てる以外ない」にまたがって主張が展開されていることから、文④から文⑤における制約構造が分析されることになる。

図 4.6 に示される制約構造から、帰結の制約写像が確認できる。ただし、この遠隔推論の成立には、ベース領域における前提事象「風雪に耐えなければならない」が補完、付加されており、それに対応するターゲット領域における前提事象「日本の危機に対処できなければならない」も補完、付加されることになる。ベース領域におけるこの補完前提事象ならびに文④を手掛かりとした「古い家では風雪に耐えることができない」という前提事象と、文⑤による結論事象「新しい家を建てなければならない」との間の帰結の制約構造の写像によって、ターゲット領域において「自民党政権では今日の日本の危機を乗り切ることができない」、「日本の危機に対処できなければならない」と「新しい政権、政治体制をつくらなければならない」との間の帰結が成立することになる。実際の事例においては、こうした読み手によって情報が補完されることによって成立する飛躍した推論がおこなわれていることも珍しくないと考えられる。

〔事例 3〕

（渡部）官僚制というと、いかにも難攻不落のように見えますが、案外、攻めるのは簡単だと思うのです。ただ、その際において、ぜひ制度として確立しておかねばならないのは、何度も繰り返しますが、犯罪的越権行為をした官僚を法で裁くことと、天下りの道を塞ぐことです。

（谷沢）やはり、天下りは法律で禁止しなければなりません。

実際問題としては、「天下りと普通の転職と、どこに線引きをするのか」という議論が出てくるわけですが、たとえば、さしあたり局長クラス以上は天下りとして禁止する。それ以下であれば許可するということでもいいんじゃないでしょうか。

もちろん現実には、局長になる前に転職して、将来の頭取候補として民間銀行に入る例は現在でもあるわけです。それも広義の天下りであることに間違いはないのですが、これはまだ罪が軽い。

というのも、そのレベルですと職務権限はまだ大きくない。権限というのは魔物でして、それをいったん行使して、味を覚えますと、もはや人間が変わってしまうのです。それを体験する前に民間に入ったのであれば、私は許してもいいと思います。

（谷沢）①.それに、たとえパラシュート式に転職しても、やはり民間の水は官庁のぬるま湯とは違います。②.そこで生き残って出世しようと思えば、民間の水の中で力一杯泳がなければ駄目なのですから。

（渡部）自分の力で泳げるのなら、ね（笑）。

(谷沢) ③.そりゃ溺れるのも、いっぱいいるでしょうね (笑). だから、四十ぐらいまでの転職は、大度量をもって許しておく (笑).

(谷沢永一・渡部昇一『誰が国賊か』. クレスト選書. 1996.)

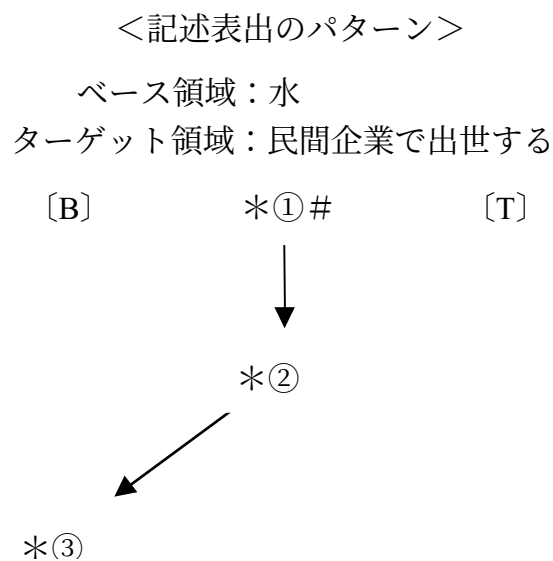


図 4.7 事例3における記述表出のパターン

＜文②における制約構造＞

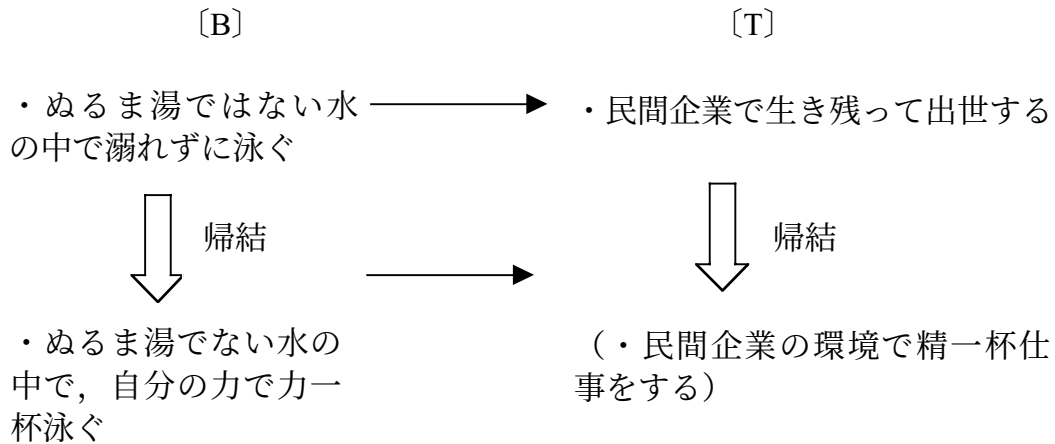


図 4.8 事例 3 における制約構造

この事例は、官僚の天下りについての対談からの抜粋である。メタファーの継承記述は、こうした対話における他者とのやりとりの中でも垣間見られると考えられる。この事例では、特に谷沢氏の発言に着目した分析となっている。

図 4.7 の記述表出パターンから、この事例は文①における「やはり民間の水は官庁のぬるま湯とは違います」が橋渡し記述となり、そこから継承記述が始まっていることがわかる。ただし、事例 1 における橋渡し記述である文①「おじはおれの『灯台』です」のような、「A は B である」といった命題型のメタファーではなく、「民間の水」といった、語彙修飾においてベース領域が導入されている形といえる。文①における橋渡し記述の後、文②「そこで生き残って出世しようと思えば、民間の水の中で力一杯泳がなければ駄目なのですから」といった混在記述が続き、さらに谷沢氏の話を受けた渡部氏の「自分の力で泳げるのなら、ね」といった発言を踏まえたうえで、再び谷沢氏の発言である文③「そりゃ溺れるのも、いっぱいいるでしょうね」に至っている。

このとき継承記述の中での強い主張としては、文②が挙げられる。したがって文②における制約構造が分析されることになる。

図 4.8 に示される制約構造から、帰結の制約写像が確認できる。文①から文③を手掛かりとしたベース領域での前提事象「ぬるま湯ではない水の中で溺れ

ずに泳ぐ」と結論事象の「ぬるま湯でない水の中で、自分の力で力一杯泳ぐ」との間の帰結の制約構造の写像によって、ターゲット領域において「民間企業で生き残って出世する」と「民間企業の環境で精一杯仕事をする」との間の帰結が成立することになる。

4.4.2 非帰結の制約写像

〔事例4〕

①.株価は実体経済の鏡である。②.だからこそ、わからぬ時は市場に聞けという鉄則がこの世界にはある。

③.ところが、鏡に映った自分の顔が醜くゆがんでいたからといって、鏡の表面をいくら細工してもたかが知れている。④.本当は、自分の顔は自分が一番よく知っているはずだ。

外遊中の森喜朗首相が、アテネから株価対策を指示した。自民党はこれを受けて、企業に自社株の取得・保有を自由化する「金庫株」の解禁を含めた株式市場の活性化を検討することになった。

確かに、年が明けてからも株価の足どりは鈍い。最近の株価低迷の原因として、米国のブームに依存していた情報技術（IT）関連株のバブル崩壊、銀行と企業の株式持ち合いの解消が取りざたされている。

株価は業績と需給と人気で決まる。今3月期企業決算の業績がいくら良くても、市場は来期の業績を織り込み始めている。そこで、自民党は需給の面から株価を支えようとしているが、問題が多い。

金庫株解禁は、企業が手持ち資金で市場から自社株を買い上げ、長期保有や売却を自由にするものだ。インサイダー取引の温床になりかねないため、現在は自社株消却やストックオプション（自社株購入権）に目的が限定されている代物だ。

預金保険機構や証券保有組合による買い上げも検討対象というが、このたぐいも昭和40年不況時の株価防衛に失敗している。政府保証などで資金を調達するため、損失が出た場合は国民負担となる。

転換国債発行で銀行保有株を買い上げる構想もある。プール機関で買った株をパッケージ化して投資家に販売、株価が上がれば投信に転換、下がれば転換国債の額面を国が保証するが、株価に政府保証をつけるようなものだとの批判がある。

その他外国からみておかしい証券税制の見直しもするというのが、それはこれまでやってなかったのがおかしいわけで、今回にかかわりなく粛々とやれ

ばよい。

株価支持策はいずれも、その場しのぎの構想にすぎず、バブル崩壊以降 1990年代を通じて繰り返し実施されたこの国のすべての先送り政策の延長線上にある。

(毎日新聞朝刊社説. 2001 年 1 月 16 日付)

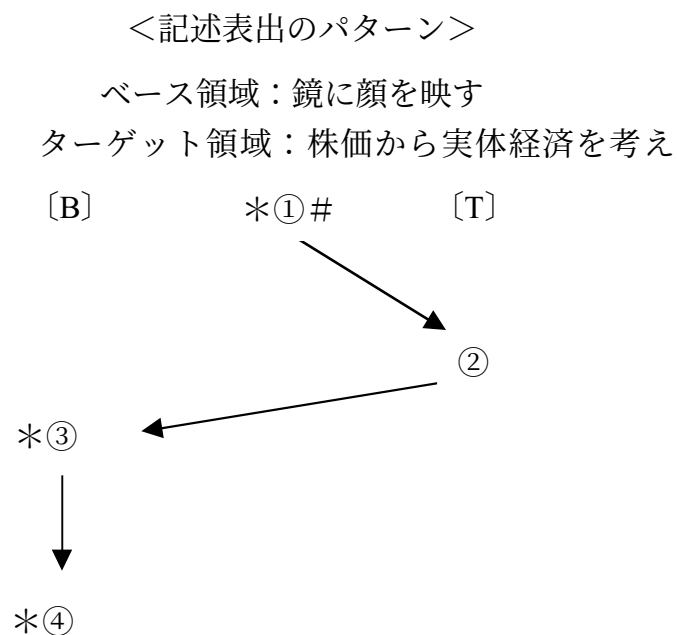


図 4.9 事例 4 における記述表出のパターン

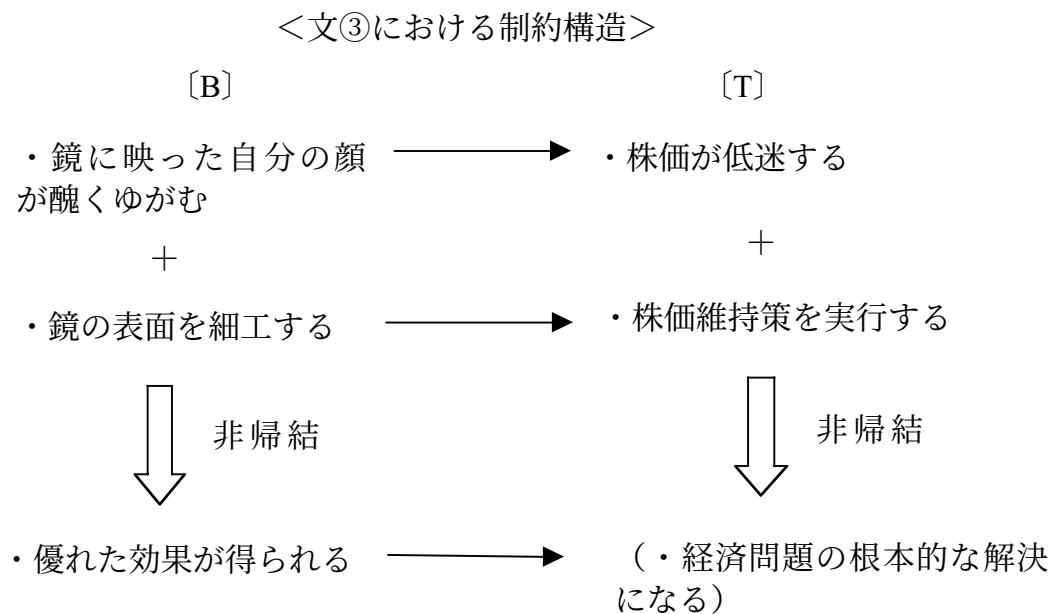


図 4.10 事例 4 における制約構造

図 4.9 の記述表出パターンから、この事例は橋渡し記述である文①「株価は実体経済の鏡である」から継承記述が始まっていることがわかる。それを受けてターゲット領域において文②「だからこそ、わからぬ時は市場に聞けという鉄則がこの世界にはある」と続く。この時、文①から文②にかけては、ベース領域が継承されていないことから、定義からメタファーの継承記述とは呼べない。ただ、文②の接続詞「だからこそ」にあるように、文の意味としては、明らかに文①から文②へと話が展開していることがわかる。文①および文②の後、文③「ところが、鏡に映った自分の顔が醜くゆがんでいたからといって、鏡の表面をいくら細工してもたかが知れている」、そして文④「本当は、自分の顔は自分が一番よく知っているはずだ」と続く。

このとき、継承記述である、文①および文③から文④にかけての部分で、強い主張がなされているのは文③であると考えられる。したがって文③における制約構造が分析されることになる。

図 4.10 に示される制約構造から、非帰結の制約写像が確認できる。橋渡し記述である文①、そして文③を手掛かりとしたベース領域での前提事象「鏡に映った自分の顔が醜くゆがむ」および「鏡の表面を細工する」と結論事象「優れた効果が得られる」との間の非帰結の制約構造の写像によって、ターゲット領

域において「株価が低迷する」、「株価維持策を実行する」と「経済問題の根本的な解決になる」との間の非帰結が成立することになる。

〔事例5〕

「①.米国の民主主義は救命ボートのようなもの. ②.つねに大波に揺られ,
足元はびしょぬれだ. ③.それでも決して沈みはしない」

(パウエル元米統合参謀本部議長 談. 朝日新聞朝刊 2000年12月6日付)

<記述表出のパターン>

ベース領域：救命ボート

ターゲット領域：米国の民主主義

〔B〕

〔T〕

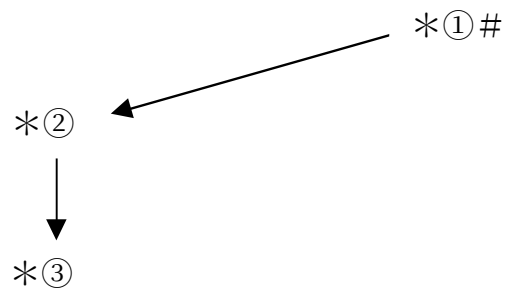


図 4.11 事例5における記述表出パターン

＜文①から文③における制約構造＞

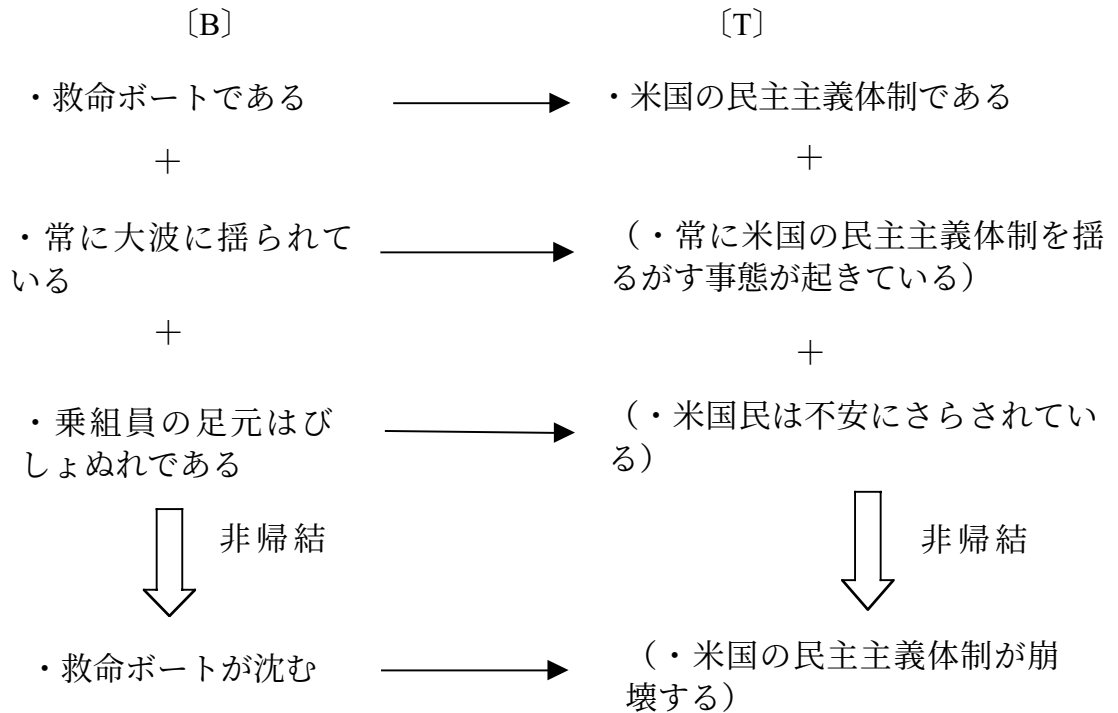


図 4.12 事例 5 における制約構造

まず、この事例については文①「米国の民主主義は救命ボートのようなもの」が厳密にいうならメタファーではなく、直喩となっており、米国の民主主義と救命ボートとが「…のようなもの」といういいかたで緩やかに結びつけられている。よって、文①は直喩である橋渡し記述といえる。

継承記述の中での主張は、文①から文③にかけて述べられている。したがって、文①から文③にかけての制約構造が分析されることになる。

図 4.12 に示される制約構造から、非帰結の制約写像が確認できる。橋渡し記述である文①を手掛かりとした前提事象「救命ボートである」、文②を手掛かりとした前提事象「常に大波に揺られている」と「乗組員の足元はびしょぬれである」、これらの前提事象と文③を手掛かりとした結論事象「救命ボートが沈む」との間の非帰結の制約構造の写像によって、ターゲット領域において「米国の民主主義体制である」、「常に米国の民主主義体制を揺るがす事態が起きている」、「米国民は不安にさらされている」と「米国の民主主義体制が崩壊する」

との間の非帰結が成立することになる。

4.4.3 無矛盾の制約写像

〔事例6〕

その翌日から三日間、頼子は五人の学生を連れて伊豆大島に火山観測の実習に行った。何も頼子が行かなくても、もっと若い助手でもいいのだが、今回は気晴らしに行ってみたいと思ったのだ。

(中略)「どう、おもしろかった？」と頼子は宿舎の会議室でその日の予定をすべて終了したところで、くたびれた顔をしている五人にたずねた。

「ええ、次々に見るものやすることがあって、まるでディズニーランドですよ」

「知らないことばかりでイライラしました」

「そうなんだ。教科書を全部覚えていても、目の前にある岩の名前がわからないと、やっぱり、すごく無力な感じですね」

「ちょっと勉強すると、自分の無知がわかるものよ」と頼子は言った。「教科書にあるのは、既知のことだけで組み立てた世界でしょ。いわば、プラモデル。部品の一つずつはわかっている知識だし、他の部品ともしっかりと合う。整合性がいい。でも、現実の世界ではわかっていることはほんの少し、広い風景のあちこちに点々と部品が散らばっているばかりで、残りはわからないものでできている」

「さっきの、ディズニーランドというのも、そうだと思います」と、熊田ゆかりという名の唯一人の女の子が言った。

「先生が最初からコースを用意しておいてくださったからそういう印象になったんで、わたしたちだけで上陸して、知っているかぎりの知識でこの地形を解釈せよと言われたら、とてもディズニーランドにはなりません。もっと混乱した自信のない感想しか出てこなかったと思います」

「その方がおもしろかったかもしれない」と男子の一人が言った。優秀な分だけ生意気な子だ。

「そう思ったら、早く独立の研究者になりなさい。闇の中を手探りで歩く気持ちがよくわかるから」

「そうなんですか？」

「そうよ。①.みんな目をつぶって象をなでているの」

「②.でも、噴火の予知とかできるわけでしょ？」

「③.それはね、ちょっとお行儀の悪いたとえだけれども、誰か象のおなかの

あたりに触っている人が、象というものは排尿の前には身体をぶるぶるっと震わせるということに気付いただけのこと。④.その人だって、象が鼻でリングを口に運ぶことは知らない」

(池澤夏樹『真昼のプリニウス』, 1993. 中央公論社)

<記述表出のパターン>

ベース領域：目をつぶって手探りで象のおなかのあたりを触っている人

ターゲット領域：研究者

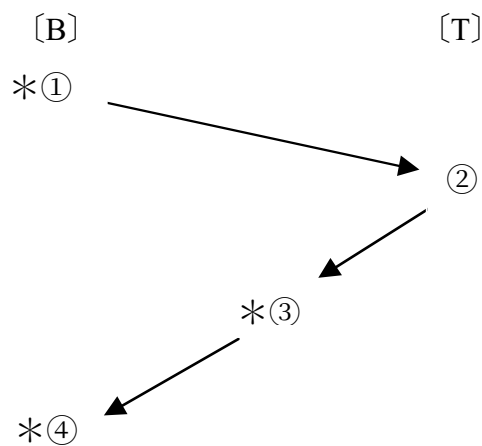


図 4.13 事例 6 における記述表出パターン

＜文③から文④における制約構造＞

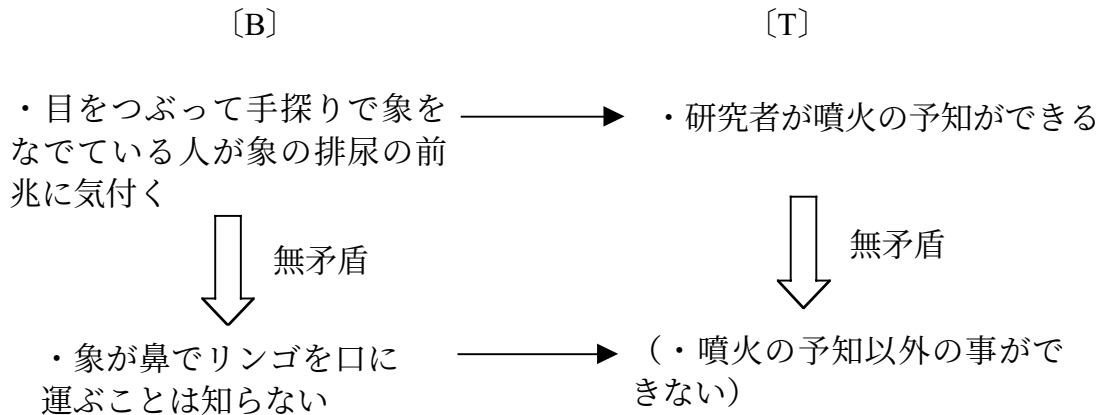


図 4.14 事例 6 における制約構造

図 4.13 の記述表出パターンから、この事例では最初にベース領域の記述である文①「みんな目をつぶって象をなでているの」から継承記述が始まり、ターゲット領域の記述である文②「でも、噴火の予知とかできるわけでしょ？」で中断されるものの、混在記述である文③「それはね、ちょっとお行儀の悪いたえだけれども、誰か象のおなかのあたりに触っている人が、象というものは排尿の前には身体をぶるぶると震わせるということに気付いただけのこと」から文④「その人だって、象が鼻でリンゴを口に運ぶことは知らない」にかけて継承記述となっている。

このとき，継承記述の中で，文③から文④にまたがって一つの主張がなされている．したがって文③から文④における制約構造が分析されることになる．

図 4.14 に示される制約構造から、無矛盾の制約写像が確認できる。文①および文③を手掛かりとした前提事象「目をつぶって手探りで象をなでている人が象の排尿の前兆に気付く」と、文④を手掛かりとした結論事象「象が鼻でリングを口に運ぶことは知らない」との間の無矛盾という制約構造の写像によって、ターゲット領域において、「研究者が噴火の予知ができる」と「噴火の予知以外の事ができない」との間の無矛盾が成立することになる。

ここまで、メタファーの継承記述のカテゴリーを提示し、事例をあげながら、帰結、非帰結、無矛盾といった制約構造の写像と記述表出のパターンとについて議論してきた。勿論、論理的には矛盾の制約写像も可能であるが、今回収集した事例の中では該当するものが見当たらなかった。ただ、メタファーの継承

記述においては、こうした制約構造にのっとった推論によって記述が展開している場合があるといつてよいであろう。

また、さらに、制約構造が収束記述によって表現されている場合も考えられる。すなわち、制約構造にのっとった推論による論理的効果と、表現としての高い効率性という記述表出の効果とをあわせ持つ記述のありかたである。本研究では、こうしたありかたを特に「収束型制約写像」と呼ぶことにしたい。

4.4.4 収束型制約写像

収束型写像とは、帰結、非帰結、矛盾、無矛盾といった制約構造が収束記述によって表現されているものである。次に収束一帰結写像の事例を挙げる。

〔事例7〕

外遊中の森喜朗首相が、アテネから株価対策を指示した。自民党はこれを受けて、企業に自社株の取得・保有を自由化する「金庫株」の解禁を含めた株式市場の活性化を検討することになった。

確かに、年が明けてからも株価の足どりは鈍い。最近の株価低迷の原因として、米国のブームに依存していた情報技術（IT）関連株のバブル崩壊、銀行と企業の株式持ち合いの解消が取りざたされている。

株価は業績と需給と人気で決まる。今3月期企業決算の業績がいくら良くても、市場は来期の業績を織り込み始めている。そこで、自民党は需給の面から株価を支えようとしているが、問題が多い。

金庫株解禁は、企業が手持ち資金で市場から自社株を買い上げ、長期保有や売却を自由にするものだ。インサイダー取引の温床になりかねないため、現在は自社株消却やストックオプション（自社株購入権）に目的が限定されている代物だ。

（中略）株価支持策はいずれも、その場しのぎの構想にすぎず、バブル崩壊以降1990年代を通じて繰り返し実施されたこの国のすべての先送り政策の延長線上にある。

株式市場が発しているシグナルはもっと別のところにあるのではないか。国債発行残高にみられるようにあれだけの借金をして得た成果は、米国がくしゃみをすればすぐ風邪をひくような経済だった。市場はそこに絶望を感じている。

やるべきことは構造改革の断行である。銀行にはこれまで多額の公的資金が注入された。しかし、昨年9月の中間決算をみると、依然として問題の先送りだ。

銀行のリストラを促し、融資先企業のリストラを進めることで不良債権も減

るという指摘は正しい。企業は新しい事業に取り組み、政府はお金ではなく規制緩和などでこれを支援していくことだ。

今回、閣僚の中からも「株価維持策は市場によいメッセージにならない」「市場はもっと構造改革をというシグナルを発している」などの発言が出ていることは一抹の救いではある。

①.株価維持策は、寒い朝、子供が寒暖計に息を吹きかけて水銀柱の目盛りを上げている姿を連想させる。②.息切れするとすぐ下がる。

市場の声に耳を澄ます時だ。

(毎日新聞 01-15-23:48)

<記述表出の流れ>

ベース領域：寒暖計に息を吹きかけて水銀柱
の目盛りを上げている姿

ターゲット領域：株価維持策

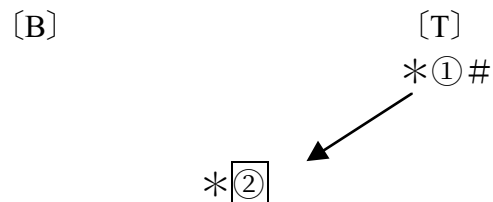


図 4.15 事例7における記述表出パターン

＜文②における制約構造＞

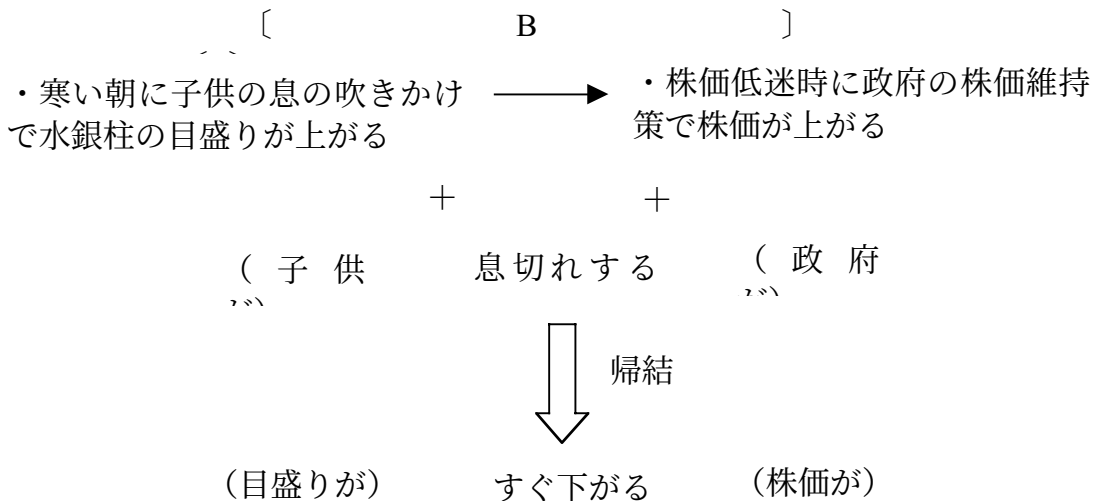


図 4.16 事例 7 における制約構造

図 4.15 の記述表出パターンから、この事例では、事例 5 同様に、文①「株価維持策は、寒い朝、子供が寒暖計に息を吹きかけて水銀柱の目盛りを上げている姿を連想させる」が直喩に近い形の橋渡し記述であるととらえられる。

その後の文②「息切れするとすぐ下がる」は収束記述ととらえられる。これは、寒暖計に息を吹きかけるといふベース領域の記述としては勿論であるが、「息切れする」といふ表現が慣習的なメタファーとして我々にとって馴染み深いものであることから、政策を実行する政府が「息切れする」といふ解釈も可能であり、「すぐ下がる」といふ表現も水銀柱の目盛りの記述としても、株価の記述としても解釈が可能であるからである。つまり、一つの記述で、両領域間の事象を一度に表現することができる。このことから収束記述は効率性の高い表現であるといふことができる。

また、このとき継承記述では文②における制約構造が核となっている。したがって、文②の制約構造が分析されることになる。

図 4.16 に示される制約構造から，帰結の制約写像が確認できる．ただし，文②における「息切れする」と「すぐ下がる」との間の帰結関係が特に収束記述によって表現されていることから，帰結関係がどの領域においてどの事象間で成立しているかということより，むしろその帰結関係自体が強調されていると考えられる．収束－帰結写像においては，事象間の帰結関係にもとづいた記述

の展開という論理的効果と、表現としての高い効率性という記述表出の効果とをあわせ持つ記述のありかたが実現しているといえる。

〔事例8〕

晩秋の夜汽車に揺られてきた体も、父が沸かしておいてくれた風呂で温まった。風呂から上がると、父が「お前が世話になった人やら、結果をいずれ伝えなあかんところには、ゆうべ全部連絡しといた」と言う。

合否発表はこの日午後の予定で、いくら私が東京から「合否問題外」と電報を打ったといっても、早過ぎる。だが父にすれば、傷心を抱えて戻って来る息子が、家に帰り着いてまで気まずい思いをしなくてすむように、と考えたのだろう。

「それで、口述試験はどうやったんや」とたずねられて、父も弁護士だから、ああ言っておればとか、こう解釈せなとか、私の失敗を分析、指摘するのかと思ったら、「そうか、そうか」と話を聞き、シドロモドロになって笑われたくだりを説明すると、「そりゃ、たしかにアカンな」と楽しそうに笑った。

①.頑に自分の内にこもってきた子が、下宿をし、仲間をつくって勉強し、遅い巣立ちをしようと羽をばたつかせている。 ②.今回は飛び立つところまでいかなかったが、ここまで成長すれば一人前は近い……。穏やかな父の表情から、今は私を信頼してくれていることが伝わってきた。

(中坊公平 「金ではなく鉄として」、朝日新聞朝刊 2000 年 12 月 25 日付)

<記述表出のパターン>

ベース領域：小鳥の巣立ち

ターゲット領域：子供の成長

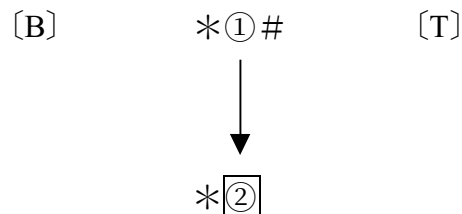


図 4.17 事例8における記述表出パターン

<文②における制約構造>

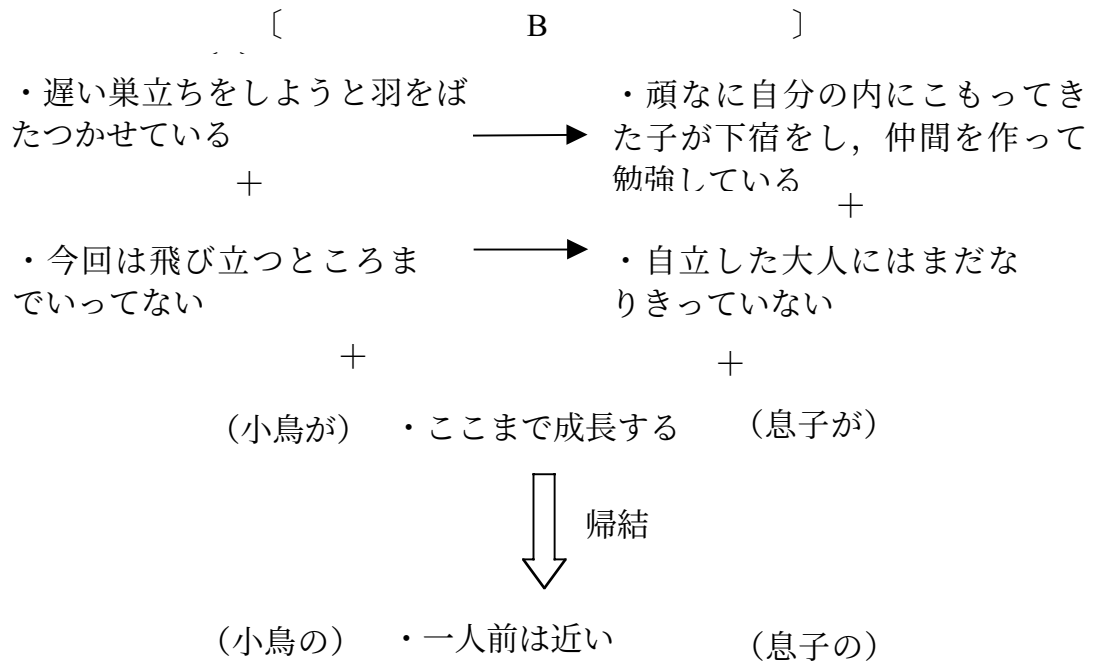


図 4.18 事例 8 における制約構造

図 4.17 の記述表出パターンから、文①「頑に自分の内にこもってきた子が、下宿をし、仲間をつくって勉強し、遅い巣立ちをしようと羽をばたつかせている」が橋渡し記述となっている。その後の文②「今回は飛び立つところまでいかなかったが、ここまで成長すれば一人前は近い…」では、特に「ここまで成長する」と「一人前は近い」とが収束記述によって表現されており、それぞれベース領域における小鳥についての記述とも、ターゲット領域における息子についての記述とも解釈が可能となっている。

また、このとき継承記述では文②における制約構造が核となっている。したがって、文②の制約構造が分析されることになる。

図 4.18 に示される制約構造から、帰結の制約写像が確認できる。特に、文②における「ここまで成長する」と「一人前は近い」との間の帰結関係が事例 7 の場合と同様、収束記述によって表現され、またそれによって帰結関係自体が強調されているととらえられる。事例 7 の場合と同様、事象間の帰結関係にも

とづいた記述の展開という論理的効果と、表現としての高い効率性という記述表出の効果とをあわせ持つ記述のありかたが実現しているといえる。

ここまで、本研究では収束型制約写像として特に収束－帰結写像を取りあげたが、収束－非帰結や収束－矛盾の制約写像といったケースも論理的には可能であろう。

第 5 章

考 察

5.1 遠隔推論－状況認識における有効性

メタファーの継承記述においては、事例分析でとりあげたように遠隔推論が成立している場合が多いと考えられる。ただ、ベース領域において成立し利用されている制約構造には、物理的あるいは数学的な規則や法則だけではない。むしろある前提に対して「こうであるべきだ／こうであるべきでない」といった規範や価値判断にもとづいて結論されるものや、あるいはなんらかの事実から、社会的常識や経験的知識にもとづいて他の事実あるいはより一般的な事実の成立が結論されるもののよう、蓋然的な法則も多いといえる。ただ、そうした蓋然的な法則が必ずしも不当というわけではない。むしろ我々の日常では蓋然的な制約構造にもとづいた推論が頻繁にかつ有効におこなわれているといえよう。精密な科学的法則のみならず、メタファーの利用、特にこうした継承記述における制約構造にもとづいた遠隔推論によって、有効な状況認識が可能であるといえる。

5.2 記述表出パターン－表現における効率性

収束型制約写像、特に収束－帰結写像の成立において、論理的な効果のみならず、収束記述による表現としての高い効率性という記述表出の効果も担っていることがわかる。Lakoff & Johnson (1980) によってメタファーの生産性についてはこれまでも議論されてきているが、こうしたいわばメタファーの効率性についてはこれまで充分議論されてきていない。

収束記述の効率性の高さは、メタファーの書き手と読み手との間で、ベース領域における制約構造の理解の共有を促進する働きがあると考えられる。収束記述とは、ベースおよびターゲット領域双方の事柄を一度に記述できるものであるから、いわば抽象的な表現である場合が多いと考えられる。ただし、そうした表現の抽象性は、メタファーの理解を損なうものではなく、むしろ抽象性によって個別の事象を捨象し、事象間における制約構造に焦点をあてるものであると考えられる。典型的な例としては、事例 7 での収束記述「息切れすると

すぐ下がる」が挙げられるであろう。ここでは何の事象についての議論かということより「息切れする」と「すぐ下がる」という帰結の制約構造自体が強調されている。収束記述は、こうした制約構造の強調によって、聞き手の理解を促すものとして機能しているにとらえることができる。

5.3 制約写像と類推写像理論との比較

メタファーの継承記述における制約写像と、第3章で概観した先行研究における類推写像理論との比較を試みる。

Lakoff & Turner (1989) の写像理論では、写像の方向がベース領域からターゲット領域の単方向のみであるとし、写像におけるメタファーの意義については考慮されているといえる。ただし、写像内容については、主に要素間の関係の写像にとどまっている。Lakoff と Turner のいう役割写像、関係写像、性質写像、背景知識写像の4つのタイプのうち、背景知識写像の議論において、関係同士を関係づける推論パターンの写像について言及はされているものの、推論パターンのとらえかたは漠然としており、推論における制約について明確で十分な議論がなされていない。

Indurkha (1993) の相互作用理論においては、オペレーターとシンボルとから構成される概念ネットワークというシステムによるベース及びターゲットの領域表現ならびに写像の議論は精密であり、数学モデルとしては有望であるといえる。ただし、Indurkha の議論は、あくまで概念ネットワークと現実世界との対応に焦点が当てられているため、写像に関しては、オペレーターと変換、シンボルとオブジェクトとの対応、すなわち、関係間、要素間の写像にとどまっている。よって、オペレーター間の関係といった、より高次の関係、もしくは現実世界において物理的な実現が困難な抽象的思考については十分に扱えないということになる。メタファー理解には、こうした抽象的な思考に関わる場合が少なくないと考えられる。

Gentner (1983) の構造写像理論は、両領域をオブジェクトと述語とから構成されるシステムとしてとらえ、特に述語構造によって属性と関係とを表現するものであり、数学的にも洗練されている。ただ、Gentner の理論の最も大きな特徴は、そうした構造的な領域表現を踏まえた写像原理にある。特に Gentner のいうシステム性の原理によって、ベース領域における、因果関係等に代表される高次の関係を構成するような関係群が優先的に写像されることになる。関係間の関係、すなわち事象間の関係といった高次の関係の写像に着目している点は、本研究との関わりも深いといえる。ただし、こうした Gentner の理論は、

高次の関係というものを因果関係のみならず広い意味において使用している。それに対して、本研究では高次の関係を帰結，非帰結，矛盾，無矛盾といった制約構造として明示化した。そして，さらに記述表出の効果も考慮している点が本研究の特色であるといえよう。

第 6 章 お わ り に

6.1 本研究のまとめ

本研究では、メタファーの継承記述という現象に着目し、次の2つの観点から継承記述の有効性を研究した。

1. 遠隔推論の制約構造.
2. 記述表出のパターン.

本研究では、メタファーの継承記述に対して、遠隔推論における、帰結、非帰結、矛盾、無矛盾といった制約構造による4つの分類を提示した。このうち、小説、随筆、新聞記事等から収集した事例の分析において、矛盾の制約写像を除く、その他の3つの遠隔推論の成立を確認することができた。すなわち、ベース領域で事象間を高次に結びつけるこれらの制約構造を用いて、ターゲット領域を構成できることが確認された。メタファーの継承記述には、こうした制約構造における論理的効果によって記述が展開している場合があるといえる。

制約の写像については、特に Gentner (1983) の構造写像理論との関わりが深いといえるが、Gentner の理論はベース領域とターゲット領域との間で対応するとされる高次の関係というものを因果関係のみならず広い意味において使用している。それに対し、高次の関係を4つの制約構造として明示化した点が本研究の特色の一つであるといえる。

記述表出パターンの分析では、特に収束記述に着目し、制約構造が収束記述によって表現されているものを収束型制約写像と呼び、制約構造における論理的効果と、収束記述による効率性の高さという記述表出の効果とをあわせ持つありかたであるとした。そして、2つの効果をあわせ持つことにより、ベース領域における制約構造が強調され、メタファーの書き手と読み手との間で制約構造に対する理解の共有が促進されると意義づけた。

6.2 課題

今後の課題としては、まず今回提案した制約写像の観点から、下手なメタファーやわかりにくいメタファー、あるいは相手をだます巧妙な話術としてのメタファーといったものがどのように生じているのかについて、どこまで有効な説明づけが可能であるかを吟味・検討する必要がある。さらに、遠隔推論が成立していない場合での継承記述のありかたも考慮し、より幅広い観点から、豊かにメタファーの継承記述というものをとらえていく必要があろう。

また、本研究ではある程度推敲されたテキストの分析であったが、そこから自然発生的な発話におけるメタファー継承の分析まで拡張し、さらに、対話実験等による制約写像ならびに記述表出の効果の実証も必要である。メタファーの継承記述については、理論的アプローチと実証的なアプローチとの統合によってより有意義な議論が期待できるといえよう。

参 考 文 献

- [1] Barwise, J. & Seligman, J. (1997) *Information flow: The logic of distributed systems*, Cambridge University Press.
- [2] Black, M. (1962) *Metaphor, Models and metaphors*, Cornell University.
- [3] Falkenhainer, B. , Forbus, K. D. & Gentner, D. (1989) The structure-mapping engine: Algorithm and examples. *Artificial Intelligence*, 41, pp- 1-63.
- [4] Gentner, D. (1983) Structure-mapping: A theoretical framework for analogy. *Cognitive Science*, 7, pp.155-70.
- [5] Gentner, D. & Gentner, D. R. (1983) Flowing water or teeming crowds: Mental models of electricity, Gentner, D. & Stevens, A, L. Eds, *Mental models*, Lawrence Erlbaum Associates. pp.99-129.
- [6] Gentner, D. (1988) Metaphor as structure mapping: The relational shift. *Child Development*, 59, pp.47-59.
- [7] Holyoak, K, J. & Thagard, P. (1995) *MENTAL LEAPS: Analogy in creative thought*, MIT Press. (鈴木宏昭・河原哲雄 監訳 『アナロジーの力』, 新曜社.)
- [8] 池澤夏樹 (1993) 『真昼のプリニウス』, 中央公論社.
- [9] Indurkha, B. (1993) *Metaphor and cognition: An interactionist approach*, Academic Publishers.
- [10] Lakoff, G. & Johnson, M. (1980) *Metaphors we live by*, University of Chicago Press. (「渡部他訳 『レトリックと人生』, 大修館書店)
- [11] Lakoff, G. & Turner, M. (1989) *More than cool reason: A field guide to poetic*

metaphor, University of Chicago Press. (「大堀訳『詩と認知』, 紀伊国屋書店)

[12] 下嶋篤 (1998) チャンネル理論に何ができるか, 『日本ファジイ学会誌』, 10, pp.775-784.

[13] 鈴木宏昭 (1996) 『類似と思考』, 共立出版.

[14] 谷沢永一・渡部昇一 (1996) 『誰が国賊か』, クレスト選書.